



ムードの「た」の過去性

定延, 利之

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学国際文化学部紀要, 21:1*-68*

(Issue Date)

2004-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001271>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001271>



ムードの「た」の過去性*

定延利之

1. はじめに

言語表現が一見、複数個の意味を持っていて多義的であるように思えることはよくある。そして、それらの意味どうしに何らかのつながりを考えつくことは、必ずしも難しいことではない。だが、その考えがただのこじつけではなく、もっともな考えであると主張するには、当該の言語表現がさまざまな文脈に応じて自然になったり不自然になったりすることを、その考えが有効に説明できるということをまず示さなければならない——以上の認識に立つ時、現代日本語の「た」に関するこれまでの議論には、その量と成果に圧倒されつつも、1つの欠落を感じずにはいられない。「た」は、或る時はテンス（過去）を、或る時はアスペクト（完了）を、また或る時はムード（反事実他¹）を意味するように見える。このように「た」は一見、多くの意味を持つように思える。それらの意味どうしに何のつながりも全く認めず、これらの「た」を単なる同音異義とする説はない。だが、どのようなつながりを認めるかについては、さまざまな説がある。たとえば、テンス的な意味とアスペクト的な意味のつながりについては、一方では、このつながりをさほど認めず、テンス的な意味とは別に「た」の意味としてアスペクト的な意味を設ける説がある（寺村（1984）など）。しかし他方では、テンス的な意味とアスペクト的な意味のつながりを緊密なものとする結果、「た」の意味としてはテンス的な意味だけを設けてアスペクト的な意味を設けず、つまりアスペクト的な意味の「た」も実はテンス的な意味の「た」であると考え、アスペクト的な意味の「た」とテンス的な意味の「た」の違いは用法レベルの違いだとする説もある（井上（2001）など）。テンス的な意味とムード的な意味のつながりについても同様で、一方では、このつながりをさほど認め

ず、テンス的な意味とは別の意味としてムード的な意味を立てる説がある（思い出しの「た」に関する金田一（1976）など）。その一方で、テンス的な意味とムード的な意味のつながりを緊密なものと考え、「た」の意味としてはテンス的な意味は設けるがムード的な意味は設けず、つまりムード的な意味の「た」も実はテンス的な意味の「た」であると考え、テンス的な意味の「た」の違いとムード的な意味の「た」の違いは用法レベルの違いだとする説もある（三上（1953）など）。さらに、「た」の意味どうしに緊密なつながりを認めた結果、テンス・アスペクト・ムードといった文法カテゴリじたいのとらえ直しに進む説もある。これはたとえば「過去というものは過ぎ去っており、現在ほどは、現実のものとして感じられにくいので、過去形はそれだけ反事実というムードの意味を持ちやすい」というように、テンス・アスペクト・ムードが本来的に相関する、もっといえばはっきり分けられないという考えである（この考えは寺村（1971, 1984:319-320）で可能性として示唆され、少なくとも一部のムード的な意味の「た」に関して工藤（1997）で支持されている）。以上のような各説は、たしかに『『た』の意味どうしは本当につながっているのか？』という問題に対する説と言える。だが、ごく一部の例外を除けば、それぞれの説において『『た』の文はどのような文脈でなぜ自然なのか？ どのような文脈でなぜ不自然なのか？』という問題がいかんうまく説明できるかという論は展開されていない。筆者の観察によれば、「た」の自然さは文脈に敏感であり、文脈を少し変えるだけで「た」は自然さが大きく影響される。このような、「た」と文脈との密接な関係をどう説明するかという最も重要なはずの議論は、従来の研究にはほとんど見ることができない。そこで本稿では、「た」の自然さに着目した観察を通して、「た」の意味どうしのつながりを論じる。但し考察対象は、いわゆるムードの「た」の一部にかぎる。

あらかじめ、ムードの「た」の内容を、ムードの「た」でない「た」と対比する形で、かんたんに紹介しておこう。たとえば次の文（1）によれば、

- (1) 二十世紀初頭は、大気における二酸化炭素の割合は0.03パーセント程度であった。

命題「大気における二酸化炭素の割合は0.03パーセント程度である」の成立時点（二十世紀初頭）は過去である。この文（1）の末尾に現れている「た」は、『た』は命題の成立時点が過去であることを表す」という考えで説明できそうに見えるので²、ムードの「た」ではない。以下ではこのような「た」を便宜上、テンスの「た」と仮称する。これに対して次の文（2）を見てみよう。

- (2) [さがしていた本をカバンの中に発見して] あ、あった。

さがしていた本を発見した話し手が、「た」を使って文（2）のように叫ぶことは自然である。この場合、話し手の表現意図は命題〔本がカバンの中に〕ある」を現在成立している命題として表すことにある。それにもかかわらず文末には「た」が現れている。この「た」は『た』は命題の成立時点が過去であることを表す」という考えでは説明できない。さらに、『た』は完了というアスペク的な意味を表す」という別の考えを持ち出したところで、やはり説明できない。結果として文（2）の「た」は、「話し手の何らかの態度（文（2）の場合は『発見』）を表す」としか説明できないように見える。ムードの「た」とは、このような「た」を指す³。ひとくちにムードの「た」といっても内容はさまざまである。詳細は第3節以降で紹介するが、本稿で取り上げるのは、主節末尾に現れる「た」のうち⁴、筆者が仮に「発見の『た』」「思い出しの『た』」「知識修正の『た』」「反実仮想の『た』」と呼ぶ「た」である。

これらのムードの「た」が見かけ上だけでなく、本当に「話し手の何らかの態度を表す」としか説明できないのかどうかは、上で少し触れたように諸説があり（これも第3節以降でくわしく紹介する）、一つの争点になってい

る。ムードの「た」については、「事実はずでにこれまでにほとんどあげつくされていると思われる」（寺村（1984:105））、「事実はお揃ってしまっている」（工藤（2002:27））という認識が一般的なようだが、本稿はこれまで知られていない諸事実を掘り起こし観察することによって、「ムードの『た』の意味は話し手の態度を表すとしか説明できない」という考えが不当であることを示す。他の言語表現と同様、ムードの「た」も文脈に敏感であり、文脈を少し変えるだけでムードの「た」は自然さが大きく影響される。このような、ムードの「た」と文脈との密接なつながりは、「ムードの『た』は『発見』『思い出』『知識修正』『反実仮想』などの話し手の態度を表す」という考えでは、大雑把すぎて説明できない。文脈との密接なつながりを説明するには、ムードの「た」の意味を過去と考える説（典型例を挙げれば井上（2001）・金水（1998, 2000, 2001））に立つ必要がある。以下、発見の「た」・思い出しの「た」・知識修正の「た」・反実仮想の「た」の順にくわしく論じるが、そこで用いる概念を次の第2節で紹介しておく。

2. 用いる概念

本稿では「知識と体験」「情報のアクセスポイント」「探索」という概念を用いる。以下、これらを順に紹介する。

2.1. 知識と体験

本稿は或る意味で三上（1953, 1972:222-223）の指摘を出発点としている。三上（同）はたとえば次の（3）について、

- (3) a. この椅子は先刻からそこにある。
b. この椅子は先刻からそこにあった。

文（3a）は客観的事実を直接的に表現しており、文（3b）は客観的事実を経験として間接的に表現している旨述べている。ここで述べられている「直

粹な知識ではなく、この宇宙飛行士のかなり個人的な体験をもとにした知識を表現している⁵。この場合、情報の共有可能性は限定されている。たしかに、宇宙飛行士本人は「いや、あれは自分の記憶違いで、やっぱり地球は青かった」と自分の発言を撤回できる。また、同行した別の宇宙飛行士（つまり共同体験者）も「そうだ。あの時たしかに、地球はなぜか赤かった」「何を寝ぼけているのだ。あの時、地球は青かったではないか」など、「地球は赤かった」発言を肯定したり批判したりできる。だが、その時点で宇宙から地球を見ていない者は（「地球が赤かったはずかどうか」は問題にしやすいが）「地球が赤かったかどうか」は問題にしにくい。

いまの宇宙飛行士の例には、体験者（宇宙飛行士）と情報を共有可能な他者（同行の宇宙飛行士）が、まだ十分考えられる。だが、他者をもっと情報を共有しにくい例もある。たとえば、宇宙ステーションで催眠術師に「いまから私が3つ数えると、皆さんは色彩感覚が一時的におかしくなります。窓の外の地球や月は、ふだんとはまったく違う色に見えるでしょう。どういう色になるかは人それぞれです。はい、1, 2, 3」と術をかけられた者の1人が、後になってその時の体験を振り返り、「気が付くと窓の外の月は緑だった。地球は赤かった」のように述懐するという場合である。この例では、「地球や月がどういう色に見えるかは、人それぞれである」という前提の上で、外界の事物のあり方（地球や月の本来の色）にしばられない、個人的な形で体験（地球や月の見え方）に由来した知識が述懐されている。これは知識とはいえ、かなり体験の性質を色濃く残している。そのため、「地球が赤かったかどうか」を問題にすることは、本人にはたやすいが（「あれは自分の記憶違いで、地球も緑だったのではないか」など）、他者にはなかなか難しい。もちろんこの場合でも「いや、そんなはずはない。私には確信がある。あなたの場合は、地球は黄色かった」と決めつける場合のように、共有可能な他者は絶対に想定不可能というわけではないので、この場合の情報が典型的な体験というわけではない。但し、上の2つの例よりは、知識の色彩が薄まり、体験の色彩が濃くなっている。

以上で取り上げた3つの事例（太古の地球・宇宙飛行士・催眠術）からわかるように、情報の共有可能性は程度問題であって、有る／無いという2項的把握よりも、高い～低いという連続的把握になじむ。この第2.1節の冒頭で、「共有可能性の程度に応じて、知識と体験に連続的ながら二分」と述べたのは、このような理由に基づく。だが、以下では記述のかんたんさを優先して、「知識」「体験」のように二項的な述べ方をする箇所もある。

いま取り上げた「地球は赤かった」のように、多くの文は状況しだいで知識的色彩の濃い言語情報を表したり、体験的色彩の濃い言語情報を表したりする。だが、知識的色彩の濃い言語情報の表現と、体験的色彩の濃い言語情報の表現が、いつも同程度に自然というわけではない。知識的色彩の濃い言語情報を表現しやすく体験的色彩の濃い言語情報を表現しにくい文や、逆に、知識的色彩の濃い言語情報を表現しにくく体験的色彩の濃い言語情報を表現しやすい文がある。たとえば、文「草食動物とは植物を食べる動物のことです」のような、現在形丁寧体の言い換え文は、知識的色彩の濃い言語情報を表しやすく体験的色彩の濃い言語情報を表しにくい。またたとえば、「あ、まぶしい！ 何これ」などと言う時の「まぶしい！」のような、感覚を表す形容詞が述語である無題の普通体感嘆文は、知識的色彩の濃い言語情報を表しにくく体験的色彩の濃い言語情報を表しやすい。

知識と体験についてここで述べたことは、日常用語の「知識」「体験」からすればさほど意外なことではないかもしれない。だが、注意が必要な点もある。

第1点。日常用語の「知識」とちがって、本稿の知識は、情報の共有可能性という尺度だけで定義されている概念である。たとえば「犯人は男にちがいない」「犯人は男だろう」「犯人は男かもしれない」のような情報は、確信度が低く、日常用語で言う「知識」とするにはあやふやすぎるかもしれないが、本稿ではこれも「犯人は男だ」のような確信度の高い情報と同様、知識とする。このように本稿の「知識vs.体験」という対立は情報の確信度を問わない。さらに極端な例を挙げる。或る事件が起こったが、犯人の見当がっ

かないという場合でも、「犯人は誰だろう」と考える人間の心内には「犯人は……」のような枠が形成されている。これは、事件が起きたことさえ知らない人間の心内状態とは異なるので、「犯人は……」も極端に周延的ではあるが知識とする。

第2点。日常用語の「体験」は日常用語の「経験」と意味がよく似ているが⁶、本稿では体験と経験は区別される。本稿では経験とは、心身に記憶され、たくわえられるものを指す。これに対して、体験とは言語情報の1タイプを指すものである。この定義から生じる違いを3点例示しておく。第1に、一言も発しない人間についても経験を論じることはできるが、一言も発しない人間の体験を論じることはできない。第2に、文の虚偽性は体験のレベルでは論じられず、文が表す体験を話し手の経験と照合してはじめて論じられる。たとえば、実際には地球は黄色であったと思いつつ「赤かった」と言っても、話し手の体験として問題にされるのはあくまで「赤かった」である。虚偽であることはこの文によって語られる体験（「赤かった」）が話し手の実際の経験（「黄色であった」）と一致しないという形で問題になる。つまり、言語表現の直接的な意味とは経験ではなく体験である。第3に、心内にたくわえられる経験は、言語表現の形を必ずしもとらないが⁷、体験は必ず言語表現の形をとる。このような体験と経験の区別は、議論を混乱させないために必要だろう。

第3点。本稿の「知識vs.体験」という対立は、「客観vs.主観」という対立とは同一視できない。たとえば、客観的には同一の事態が立場によって「その人が私に本をくださった」「その男が女に本をやってしまった」のように表現し分けられることは珍しくない。文「その人が私に本をくださった」の話し手は、本の与え手に（表面的であるにせよ）敬意を抱く、本の受け取り手にかぎられており、他方、文「その男が女に本をやってしまった」の話し手は、本の与え手や受け取り手に敬意を抱かず、本の所有権移転を悪く評価する第3者にかぎられている。したがって、「情報の共有可能性」の定義次第では、情報「その人が私に本をくださった」や情報「その男が女に本を

やってしまった] は、共有可能性が低く、体験だとなりかねない。だが、本稿では「情報の共有可能性」をせまく定義し、これらの情報は知識であって体験ではないとする。

ひとくちに主観性 (subjectivity) といってもその内容は研究者によってさまざまである。たとえば岩崎勝一は主観性という概念を、直示論的な主観性・評価的な主観性・認識論的な主観性の3つに分ける (Iwasaki (1993: 第1章))。直示論的な主観性とは直示中心の選択に関する主観性で、上の例なら「その人」「私」「あの男」「その女」という表現に関わる。評価的な主観性とはさまざまな事物に評価を下す際の基準の主観性で、上の例なら「くださった」「やってしまった」という表現に関わる。認識論的な主観性とは、情報の確信度が個人個人で異なるという、先の第1点で述べた主観性である。「情報の共有可能性」はこれら3種の主観性とは直接関わらない。また、ラネカー (たとえばLangacker (1997)) によれば、主観性とは、認知者が表現対象からはずれる度合いだが、「情報の共有可能性」はこの意味の主観性とも一致しない。たとえば上述の催眠術の例「地球は赤かった」は、「田中さんは地球は黒かったらしいけど、私は地球は赤かった」のように、必要に応じて認知者 (田中さん・私) を表現対象に含めることができるからである。

知識と体験がさまざまな言語表現の振る舞いに関係していることはすでに論じられている。具体的には、「ときどき」「たまに」のような頻度語 (定延 (1999, 2002b, 2002c)), とりたて助詞「ばかり」 (定延 (2001a, 2003c)), 格助詞「に」「で」 (定延 (近刊)), さらに書きことばと話しことば (定延 (2003a)) といった言語表現の生起環境を説明する上で、知識と体験という区別を導入する必要があるということが (頻度語ととりたて助詞については中国語 (普通話) も含めて (定延 (2003b))) 論じられてきている⁸。本稿はこれを「た」についても適用しようとするものである。先に挙げた (3) の場合、文 (3a) 「この椅子は先刻からそこにある」が表す情報は知識的色彩が濃く体験的色彩が薄い。逆に文 (3b) 「この椅子は先刻からそこにあった」が表す情報は知識的色彩が薄く体験的色彩が濃い。では、なぜ「た」の

ない文（3a）の情報は知識的色彩が濃く、「た」のある文（3b）の情報は体験的色彩が濃いのだろうか？

2.2. 情報のアクセスポイント

何らかの情報（概念やメッセージ）を言語で表現するには、棒読みなどの特殊な場合を除けば、話し手はその情報を脳裏に浮かべる必要がある。情報を脳裏に浮かべるには、話し手は心内でその情報にアクセスしなければならない。ここで言う情報のアクセスポイントとは、話し手が情報にアクセスするための、時間軸上のよりどころである。話し手は時間軸上のいずれかの時点をアクセスポイントとして選び、そこを通じて当該情報にアクセスする（図2）。

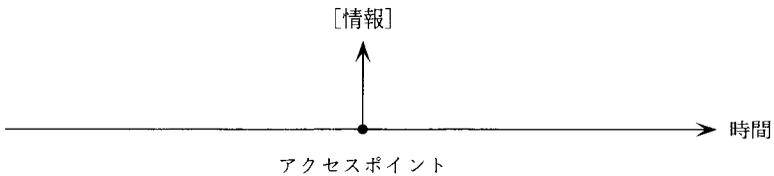


図2：情報のアクセスポイント

情報のアクセスポイントという概念を用いて本稿で主張したいことは、「テンスの『た』にせよ、ムードの『た』にせよ、『た』は、情報のアクセスポイントが過去であることを示す」ということである。

このように情報のアクセスポイントという概念を用いることには、次のような利点がある。それは、話し手にとってのなじみ深さが「た」の自然さに影響することを、この概念がうまく説明してくれるということである。ここでは、命題の成立時点が過去であるのに「た」が使えないという、これまで指摘されていない事例を取り上げて、このことを例示してみよう。

漫画『ドラえもん』の、ドラえもんとのび太の会話を想像されたい⁹。「みんなでタイムマシンで600年前の世界に行って、ピサの斜塔に住もうよ！」

というドラえもんの提案を聞けば、のび太は（たまたまピサの斜塔が650年ほど前に完成したと知っていれば）文（5a）のように返答しやすいが、文（5b）のように返答しにくい。

- (5) a. そりゃあいいや！ 600年前ならピサの斜塔も新しいからね。
 b. そりゃあいいや！ 600年前ならピサの斜塔も新しかったからね。

大学生150人に調査したところ、過半数（100人）が（5b）の返答を不自然と判断した。命題「ピサの斜塔が新しい」は過去（600年前）に成立しているにもかかわらず、である。

ことわっておくが（5b）「そりゃあいいや！ 600年前ならピサの斜塔も新しかったからね」というのび太の返答が、状況を問わずまったく不自然というわけではない。漫画『ドラえもん』の設定では、のび太はドラえもんに連れられて日常的に時間旅行をおこなっているのだから、のび太が600年前のピサの斜塔を過去（たとえば先月に時間旅行をした時）に実際に訪れている可能性はある。600年前のピサの斜塔を過去（先月）に実際に訪れた記憶を思い出している返答と想定すれば、（5b）「そりゃあいいや！ 600年前ならピサの斜塔も新しかったからね」の返答は自然になる。大学生に対するアンケート調査で「不自然」という判断が過半数を超えたとはいえ、圧倒的多数に至らなかったのは、上のようにのび太が時間旅行の常習者であるという事情によるのではないかと考えられる¹⁹。だが、いま注目したいのは、のび太の返答がこのような体験の表現である場合ではない。のび太が600年前のピサの斜塔の様子を、体験したことがないものとして表現する場合である。

単に「知識の表現に使われる『た』は、命題の成立時点が過去であることを示す」と考えるだけなら、（5a）の「600年前ならピサの斜塔も新しいからね」と（5b）の「600年前ならピサの斜塔も新しかったからね」で自然さが大きく異なることは説明できない。（5a）の「600年前ならピサの斜塔も新しいからね」は命題「600年前ならピサの斜塔は新しい」が発話時現在に

成立している以上、自然度が高いと予想される。そして(5b)の「600年前ならピサの斜塔も新しかったからね」も、命題「ピサの斜塔は新しい」が過去(600年前)に成立している以上、自然度が高いと予想される。これはちょうど、先に挙げた文(1)「二十世紀初頭は、大気における二酸化炭素の割合は0.03パーセント程度であった」が自然である原因が、命題「大気における二酸化炭素の割合は0.03パーセント程度である」の成立時点(二十世紀初頭)が過去であることに求められるのと同じである。ところが、実際には、自然さが高いのは(5a)の「～新しいからね」だけであり、(5b)の「～新しかったからね」は自然さが低い。情報のアクセスポイントという概念を取り入れれば、このことは以下のように説明できる。

この事例で話し手(のび太)が表現しようとしている情報「600年前ならピサの斜塔は新しい」は、過去の事物(600年前のピサの斜塔)に関する知識でもあり、また現在成り立っている知識でもある。したがって、この情報はアクセスポイントとして、現在と過去(600年前)の2点を持つ。話し手が現在のアクセスポイントを選べば文は(5a)の「600年前ならピサの斜塔も新しいからね」になり、過去のアクセスポイントを選べば文は(5b)の「600年前ならピサの斜塔も新しかったからね」になる。ところが、劣等生のび太を含むたいの人間にとって、600年前のピサの斜塔の様子は、600年前といえばたちまち「ピサの斜塔はこうこう」と思い当たるような、なじみ深いものではない。つまり600年前という時点は当該の知識にアクセスするためのアクセスポイントとして、あまり有効でない。600年前のピサの斜塔の様子はせいぜいのところ、「ピサの斜塔の完成は今から650年前だから、600年前というのは完成して50年しか経ってなくて……」のように、話し手が知っている、ピサの斜塔に関して現在成り立っているもっとメジャーな知識情報「ピサの斜塔は今から650年ほど前に完成」から推論される情報でしかない。これは、600年前のピサの斜塔に関する情報は、「600年前の時点」というアクセスポイントからアクセスするよりも、むしろ「現在の時点」というアクセスポイントからの方がアクセスしやすいということである。した

がって (5a) の「～新しいからね」は自然さが高く、(5b) の「～新しかったからね」は自然さが低い (図3を参照)。

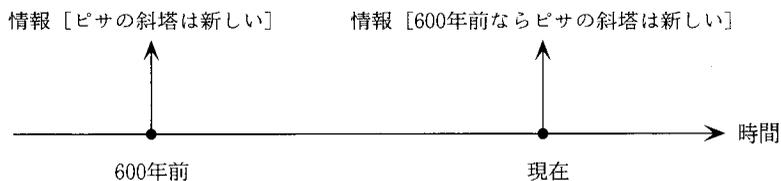


図3：600年前のピサの斜塔の様子は、600年前（過去時点）をアクセスポイントとしてすぐに思い当たる情報ではないため、アクセスポイントとしては現在時点の方が好まれる。

このような、情報のアクセスポイントという概念を用いる説明は、(5b) の「～新しかったからね」の自然さを例外的に高める2つの要因をも説明してくれる。以下、そのことを順に示す。

第1の要因は、副詞「まだ」である。自然さが低い(5b)の「600年前ならピサの斜塔も新しかったからね」に副詞「まだ」を挿入して、「600年前ならピサの斜塔もまだ新しかったからね」とすれば自然さが高くなる¹¹。このように副詞「まだ」は「～新しかったからね」の自然度を高める効果を持つ。アクセスポイントという概念を用いると、この効果は次のように説明できる：副詞「まだ」は「ピサの斜塔は現在はまだ古い昔は」のように、ピサの斜塔が古い時点（現在）と対比する形で、ピサの斜塔が古くない過去時点（600年前）を強く表すので、それだけ「過去（600年前）の時点」というアクセスポイントが選ばれやすくなる。

第2の要因は、のび太の知識状態である。たとえば、のび太が実は、ピサの斜塔の設計段階から現在に至るまでの「ピサの斜塔史」につねづね思いをはせているピサの斜塔マニアであるという状況では、(5b)の「600年前ならピサの斜塔も新しかったからね」は自然である。この状況は、600年前のピサの斜塔の情報が、「600年前といえばピサの斜塔は～」のように即座に思

い当たる形で、あらかじめのび太の心内に貯蔵されている状況である。つまりのび太が「600年前」という過去のアクセスポイントを選びやすい状況であるから「～新しかったからね」が自然になる。また、「のび太は中世ヨーロッパの世界を多少ともリアルにイメージできる利口な学生である」「のび太はピサの斜塔の歴史について学校で習ったばかりである」といった状況でも、「～新しかったからね」は自然さを増す¹²。これらの状況も、のび太がピサの斜塔史を思い浮かべやすく、したがって「600年前」という過去のアクセスポイントを選びやすい状況であると説明できる。

以上のように、話し手にとって当該の知識情報がどれだけアクセスしやすいかは、アクセスポイント選択に影響する。話し手が当該の知識情報をあまりよく知らず、当該の情報が話し手心内で過去の時点にしっかりリンクされていないければ、その過去時点から当該の情報にはアクセスしにくく、アクセスポイントとしては過去時点よりも現在時点が選ばれるということがあり得る。

2.3. 探索

ここで言う探索とは、未知の領域（たとえば見知らぬ街）がどんな様子なのか調べる、一種の体験である¹³。探索が及ぶ領域（見知らぬ街）を探索領域と呼ぶ。探索には「探索領域はどんな様子なのか？」という問題意識（探索意識）が必要である。見知らぬ街を見ている、ただぼんやりと眺めており、探索意識がないのであれば、探索をおこなっているとは言えない。

或る部屋を探索領域とする探索の場合、ただ「その部屋はどんな様子なのか？」という探索意識だけで探索する場合もあるが、たとえば「なくした手帳はどこか？」のような、別の課題を解決するために探索する場合もある。このような、探索によって解決しようとする課題を探索課題と呼ぶ。探索課題と探索意識は似ているが別物である。探索課題は探索に必須ではないが、探索意識は探索に必須で、探索意識がなければ探索にはならないからである。両者は、探索課題が課せられるほど探索意識が活性化するという関係にある。

探索は、その時間的スケールに応じて、マクロ探索とマイクロ探索に区分される。たとえば、或る部屋を探索領域とするマクロ探索とは、その部屋に入った時点に始まり、その部屋を退出した時点で終了する一つの大きな探索である¹⁴。但し、「なくした手帳はどこか？」のように探索課題を備えた探索の場合は、探索領域（部屋）の中で探索課題が解決すれば（手帳が発見されれば）、その時点が終期となる。このようにスケールの大きなマクロ探索とは別に、探索領域である部屋の中で一瞬一瞬連続しておこなわれる、スケールの小さな探索がある。それがマイクロ探索である。いまおこなうマイクロ探索は次の瞬間にはもう終わり、過去のものとなっている。これに対してマクロ探索は、探索者が探索課題を解決するか、探索領域を退出するかしてはじめて終了する。

概念の紹介は以上である。次の第3節以下ではこれらの概念を用いて、ムードの「た」を一つずつ見ていく。ムードの「た」の内容について、諸説は厳密には一致していないが、本稿ではこれを、発見の「た」・思い出しの「た」・知識変更の「た」・反実仮想の「た」・その他の「た」に分けておく。

3. 発見の「た」：「あ、あった」

たとえば、さがしていた本をカバンの中に発見した場合、本を目の前にしながら文(2)「あ、あった」のように言えることは、すでに第1節で述べた。ここでは(6)として再掲しておく。

(6) [さがしていた本をカバンの中に発見して] あ、あった。

この「た」のような、発見という話し手の態度と深く関わると思える「た」は、発見の「た」と呼ばれることが従来からあり（たとえば国広（1967）を参照）、本稿でもそう呼ぶ。

発見の「た」としてどこまでを認めるか、発見の「た」は本当に過去の「た」とは考えられないのかという問題について、先行研究はさまざまな立

場に分かれる。そのような状況にもかかわらず、発見の「た」の用法を説明する上でどの説が有効か、という観点からの議論はあまり進んでいない。そこで以下ではまず、どのような立場をとっても発見の「た」と思える「た」について4点の観察をおこない、それらを説明する上で、発見の「た」の意味を過去とする考えが有効であることを示す。その上で、発見の「た」としてどこまでを認めるかを、先行研究に言及しながら論じる。

3.1. 代行者の例外性

最初に観察するのは、発見の「た」の文を発することができる話し手が限られているということ、そして、「代行者」がこの制限を例外的にくぐり抜けるということである。

たとえば、殺人事件が起これ、事件を目撃した者の証言を捜査員が聴取しているとしよう。この時、殺人事件の目撃者は捜査員に文(7)のように、

(7) 犯人は右手の指が一本ありません。

「た」のない文を発して証言してもよいが、文(8)のように、

(8) 犯人は右手の指が一本ありませんでした。

「た」の文で証言することもできる。だが、仮に目撃者が文(8)「犯人は右手の指が一本ありませんでした」の形で証言したからといって、それを聞いた捜査員がそのまま署に戻り、上司に(9)のように報告することは、

(9) デカ長、新情報です。犯人は右手の指が一本ありませんでした。

あまり自然ではない。聞き込みをする前に捜査員と上司が「ひょっとして、犯人は右手の指が欠けているんじゃないでしょうか」「いやあ、どうかなあ」

など、事前に犯人の身体状況について思案したり、議論したりしていれば文(9)は「新情報です」の部分の削れば)自然だが(この自然さは第3.3節で述べる「思いまどい効果」によるものである), そうでなければ, 「た」のない文(10)で報告する方が自然である。

(10) デカ長, 新情報です。犯人は右手の指が一本ありません。

このように, 発見の「た」の文を発することができる話し手は制限されている。

ところが, 上のような話し手の制限が働かない場合もある。たとえば, 死体を調べた検死官は上司に, 文(11)のように報告してもよいが,

(11) 死体には目立った外傷はありません。

文(12)のように,

(12) 死体には目立った外傷はありませんでした。

「た」の文を発して報告することもできる。そして, 検死官から(文(11)の形であれ, 文(12)の形であれ)報告を受けた上司は記者会見で, 「た」のない文(11)「死体には目立った外傷はありません」を発して報告することも自然だが, それだけではなく, 「た」のある文(12)「死体には目立った外傷はありませんでした」を発して報告することも同程度に自然である。

では, 発見の「た」の使用に関して, 聞き込み捜査員と検死官上司で, なぜこのような違いが生じるのだろうか? 聞き込み捜査員も検死官上司も, 「発見」したことを発話しているのであって, 両者の態度に大きな差があるとは思われない。したがって, 問題の「た」が過去概念に関係なく, ただ話し手の態度を表していると考えるかぎり, この問題に対して満足のいく説明

は与えられそうにない。対照的に、問題の「た」が過去を表すと考え、「体験由来の知識表現の場合、話し手が情報をイメージするためのアクセスポイントは命題の成立時点ではなく、体験の時点である。『た』は、体験時点が過去であることを表す」と考えさえすれば、聞き込み捜査員と検死官上司の違いは、次のように説明できる。

まず聞き込み捜査員について述べる。目撃者の証言(8)「犯人は右手の指が一本ありませんでした」は、犯人の身体的特徴に関する純粋な知識の表現ではなく、殺人のシーンを探索領域とする目撃者の探索体験をもとにした知識表現である。末尾に「た」が現れているのは、体験時点が過去だからである(図4参照)。

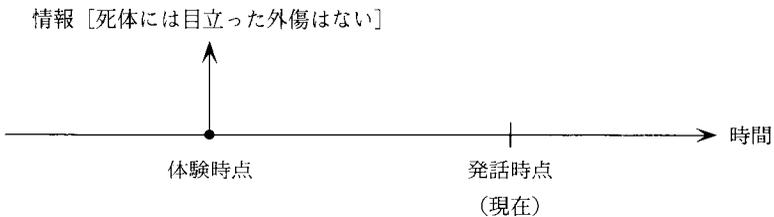


図4：発見の「た」は体験時点が過去であることを表す。

第2.1節で述べたように、体験とは個人的なものであって、他者の体験は自己の体験と同じではない。目撃者の探索体験は聞き込み捜査員の体験と同一視できず、聞き込み捜査員は目撃者の探索体験を、自分の探索体験のように語ることはできない。したがって、聞き込み捜査員が「た」の文(9)「デカ長、新情報です。犯人は右手の指が一本ありませんでした」で上司に報告することは不自然である。聞き込み捜査員は「た」のない文(10)「デカ長、新情報です。犯人は右手の指が一本ありません」で、聞き込みを通して得られた純粋の知識の表現をおこなうことしかできない。

次に検死官上司について述べる。上の目撃者の場合と同様、検死官の報告(12)「死体には目立った外傷はありませんでした」も、純粋な知識の表現で

はなく、死体を探索領域とする検死官の探索体験をもとにした知識表現である。そしてもちろん検死官上司にとっても、他者（検死官）の体験は自己（検死官上司）の体験と同じではない。だが、いま問題になっている他者（検死官）は自己（検死官上司）の部下であり、検死に関する自己の「代行者」と言える。ここで言う代行者とは、自己の延長物としてとらえられた他者を指す。たとえば、歯医者に歯を治してもらうことを「歯医者に歯を治してもらう」と言わず「歯を治す」と言うのは、歯医者を代行者化した表現である。建築業者に家を建ててもらうことを「家を建てる」と言うのは建築業者を代行者化した表現である。殺人事件の目撃者は聞き込み捜査官の代行者ではないが、検死官は検死官上司の代行者である。聞き込み捜査官は「事件を目撃した」わけではないが、検死官上司は或る意味では「検死をおこなった」と言える。そこで、記者会見という外部への発表の場では、検死官上司は文（11）「死体には目立った外傷はありません」のように、検死官の探索体験とは切り離された知識の表現も可能だが、検死に関する部下の探索体験を自己の探索体験と同一視し、その体験をもとにした知識表現も可能である。それが文（12）「死体には目立った外傷はありませんでした」であり、末尾の「た」は探索体験時が過去であることを表す。

3.2. 発見場所

次に注目したいのは、モノを発見する場所が「た」の自然さに影響するということである。これも「体験由来の知識表現の場合、話し手が情報をイメージするためのアクセスポイントは命題の成立時点ではなく体験の時点である。『た』は、体験時点が過去であることを表す」と考えることによってはじめて説明できる。

たとえば田中という友人と山中をハイキングしていたところ、すぐ目の前の崖の上に、思いがけずサルを発見したとする。崖の上のサルを指さしながら、サルに気づかない友人に、次の文（13）のように言うことは自然だが。

(13) 田中さん、ほら、あんなところにサルがいるよ。

「た」を使って文(14)のように言うことも自然である。

(14) 田中さん、ほら、あんなところにサルがいたよ。

命題「あんなところにサルがいる」は、発話時現在に成立しているにもかかわらず、である。ところが、自宅の縁側に立ってふと庭を見たところ、思いがけずそこにサルを発見し、サルに気づかない家族の注意を喚起するという場合は、文(15)のように言うことは自然だが、

(15) ほら、あんなところにサルがいるよ。

文(16)は唐突で自然さが落ちる。

(16) ほら、あんなところにサルがいたよ。

このように、問題の「た」の自然さは、サルの発見場所（山中か自宅か）に影響される。

以上で指摘した発見場所の影響は、「発見の『た』は過去概念と関わらない形で、話し手の態度を表す」という考えでは説明できない。山中をハイキングしていた場合も、自宅の縁側からふと庭を見た場合も、思いがけずサルを発見すること自体に変わりはない以上、山中の場合と自宅縁側の場合で「た」の自然さが違うということは、態度の違いとしては説明しきれないだろう。これに対して、発見の「た」の意味を過去と考えれば、これは次のように説明できる。

「環境（探索領域）はどんな様子なのか？」という探索意識が活性化されるほど、話し手は情報を知識としてではなく、探索という認知体験として表

現しやすくなる。自宅のような、かなりよく知っている空間でも、改めて未知空間として、探索領域とすることは十分あり得るが、自宅よりも山中のようなよく知らない領域の方が、探索意識は活性化しやすく探索は自然である。したがって、サル存在を純粋の知識としてではなく、探索という体験に基づく知識として表現することも、自宅より山中の方が自然である。

一見この説明の反例になると思えるケースも存在するが、これらは探索課題という概念でうまく説明できる。たとえば、自宅の庭の家庭農園がしょっちゅうサルに食い荒らされて困っており、こんどサルを見つけたら空気銃で撃ってやるなどと考えていたという状況では、自宅の庭にいるサルを見ながら「お〜いサルがいたぞ〜。空気銃持ってきて〜」などと別室の家族に叫ぶことは自然である。この第3.2節で述べた場所の違い（山中か自宅か）からすれば、このケースは一見、反例と思えるが、実はそうではない。この例の状況では、「庭にサルはいはいしまいか？」という探索課題が設定されているので、それだけ探索意識が活性化されやすく、サル存在が探索という体験として表現されやすい。末尾の「た」が自然なのは、そのためである。洗面所にゴキブリを発見し、「お〜いゴキブリがいた〜。殺虫剤持ってきて〜！」などと家族に言うことも同様である。これはゴキブリがひどく嫌われる害虫であって、家の中にゴキブリがいないかと家族が常々（もちろん潜在的にはあるが）気を付けているという想定が自然だからである。

3.3. 文型と思いまどい効果

次に観察したいのは、発話時現在に成立している命題が「た」で表現できるかどうか、文型によって違う場合があるということである。

たとえば、山中をハイキングしている最中にサルを発見した話し手は、その大きさに驚き、そのことを表現するとする。この場合、巨大なサルを見ながら文(17)のように言うことは自然だが、

(17) 大きいな〜。

文(18)のように言うことはふつう不自然である。

(18) 大きかったな～。

文(18)は、話し手がサル大きさについて「この時期、この山のサルは大きいのではないか」「いや、小さいかもしれない」などと、サルを見る前に思いまどってれば「なんだ、大きかったな～」「やっぱり大きかったな～」のように自然になるが(これを「思いまどい効果」と仮称しておく)、思いまどい効果がなければ不自然である。

つまり、モノ(サル)が発話現場に存在しており、思いまどい効果もない場合は、問題の「た」は、存在文(文(14)「田中さん、ほら、あんなところにサルがいたよ」)では自然、存在文以外(文(18)「大きかったな～」)では不自然という、文型の違いがある¹⁵。

このような文型の違いは、サルが発話現場からいなくなれば消えてしまう。山を下りて、サルが視界からいなくなれば、存在文と存在文以外の違いはない。その山にサルが存在することは「あの山にはサルがいるよ」「あの山にはサルがいたよ」いずれでも表現できるし、その山のサルが大きいことは「あの山のサルは大きいよ」「あの山のサルは大きかったよ」いずれでも表現できる。では、モノが発話現場に存在している場合にかぎって、上のような文型の違いが生じるのは、なぜだろうか？

サルの存在も大きさも、話し手が発見することには変わりはない以上、サルの存在を表現する場合も、大きさを表現する場合も、話し手の態度は「発見」とでも言うべきものである。したがってこの問題も、「発見の『た』は過去概念と関係なく話し手の態度を表す」という考えでは説明困難である。しかし、「体験由来の知識表現の場合、話し手が情報をイメージするためのアクセスポイントは命題の成立時点ではなく体験の時点である。『た』は、体験時点が過去であることを表す」と考えれば、この問題はうまく説明できる。

山を下りて、サルがもはや発話現場にいない場合、自分が山で出会ったサ

ルについての情報は、山を探索領域とするマクロ探索という体験として表現できる。マクロ探索は、一般に探索時間が長いので、存在情報も非存在情報も得ることができる。このことを反映して、マクロ探索を表現する場合は、特に文型の制約はない。

これとは対照的に、発話現場にサルがいる場合、そのサルに関する体験はマクロ探索ではなくマイクロ探索でしかありえない。マイクロ探索は一瞬でおこなわれるので、一回のマイクロ探索で得られる情報はそう多くない。発話直前に或るモノを発見した場合、発話直前のマイクロ探索で得られる情報は、ごく基本的な情報にかぎられると考えるも不自然ではないだろう。ここで重要なのは、存在情報が、あらゆる情報の中で最も基本的な地位を占めているということである。われわれは、(現実世界にであれ、夢の世界にであれ)存在しないサルについて、その大きさを語ることはできない。モノの存在情報([サルがいる])は、モノ(サル)の情報のうち最も基本的な情報であり、モノのアリサマ情報([サルが大きい][サルがかわいい]他)はすべて存在情報([サルがいる])を前提にしている。文型の制約はこれを反映したものと考えることができる。

では、発話現場にいるサルの大きさを、「なんだ。大きかった」「ほら。やっぱり大きかった」のように「た」の文で自然に表現可能にする、思いまどい効果とはどこから生じるのだろうか？ 事前の思いまどいとは、探索課題の設定にはかならない。モノのアリサマ情報は基本的な情報ではないので、通常は、発話直前のマイクロ探索で得やすい情報ではないが、事前の思いまどいによって探索課題[この時期、この山のサルは大きいか]が設定されれば、サルの大きさに関する情報はそれだけ瞬時に取り出しやすくなる。第5節で述べるように思いまどい効果は、知識修正の「た」に関わることもあるが、このように発見の「た」に関わることもある。

3.4. 時点限定表現

以上の第3.1節～第3.3節では、発見の「た」の用法を説明する上で、「発

見の『た』は、過去概念と関わらない形で話し手の態度を表す」という考えよりも、「発見の『た』が話し手の態度（発見）を表すのは、過去概念を経由してのことである。発見の『た』が直接的に表すのは、体験時点が過去であるということである。体験由来の知識表現の場合、話し手が情報をイメージするためのアクセスポイントは、命題の成立時点ではなく体験の時点である」という考えが有効であることを論じてきた。だが、一見これらと逆の結果を示すかに思える現象もある。ここで観察するのは、時点限定表現の有無が、発見の「た」が使われる文の自然さに影響を与え得るということである。ここで時点限定表現と呼ぶのは、「先月は」のように、文字どおり時点を限定する表現である。

たとえば殺人事件が起きた翌月、事件の目撃者が捜査員に犯人の特徴を聞かれたとする。この状況で、目撃者が捜査員に文(19)のように証言することは不自然である。

(19) 犯人は先月は白人でした。

この不自然さは、「人間の人は一生変わることはない」という、現実世界に関する常識から説明できる。つまり、目撃者が犯人を見たのは先月であるとはいえ、先月の時点で犯人が白人なら、今月も、そして今後も犯人は白人のはずである。一生変わることのない情報（犯人の人種）を、わざわざ先月のことと時点を限定して返答するのは不自然である¹⁶。

ところが、上と同じ状況で文(20)のような証言は自然である。

(20) 犯人は白人でした。

文(20)には、いま論じた文(19)「犯人は先月は白人でした」とちがって「先月は」のような時点限定表現は含まれていないが、文末には「た」がある。このことは一見、「発見の『た』は過去を表す」という考えを不利に思

わせる。過去を表す「た」が使われている以上、目撃者が犯人の人種を、過去に限定して返答していることに変わりはないと考えられるからである。一生変わることはない情報（犯人の人種）を、わざわざ過去に限定して返答するのは不自然なはずだが、実際には文（20）「犯人は白人でした」という形の返答は自然である。では、この返答の自然さはどのように説明すればよいのだろうか？ 文（20）「犯人は白人でした」の「た」が過去を表すという考えは実は正しくなく、この「た」は過去概念と関わらない形で話し手の態度（発見）を表すのだろうか？

そうではない。文（19）「犯人は先月は白人でした」の不自然さと文（20）「犯人は白人でした」の自然さは、「発見の『た』は過去を表す」と考える立場からも以下のように説明できる。

文（19）「犯人は先月は白人でした」も文（20）「犯人は白人でした」も、純粋な知識の表現としては不自然である。それは、命題「犯人は白人」がどの時点でも成立する以上、これをわざわざ過去時点に限定して証言することが不自然だからである。だが、探索体験に基づく知識の表現としては、文（19）「犯人は白人でした」は自然である。それは、目撃者が命題情報「犯人は白人」を得た体験（たとえば犯人のいかにも白人らしい外見を目撃するなど）が過去という想定が自然だからである。他方、文（20）「犯人は先月は白人でした」は体験の表現としても不自然である。それは、時点限定表現「先月は」によって、体験が全部で複数回あること（たとえば先月の目撃体験と、先々月の目撃体験）が語られてしまうからである。犯人の人種は一生変わらないものであるから、一回の体験で情報「犯人は白人」が得られれば、再度の体験は不要だし、それを語る必要もない。

3.5. まとめと考察

以上では、発見の「た」に関する観察として「代行者の例外性」「発見場所」「文型」「時点限定表現」の4つを取り上げた。さらに、それら4つを説明するには、「発見の『た』は、探索という体験の時点が過去であることを

表す。体験由来の知識表現の場合、話し手が情報をイメージするためのアクセスポイントとしては、命題の成立時点ではなく体験の時点が選ばれる」という考えが有効であることを示した。

以上の考察の結果をふまえて、先行研究を振り返ってみよう。発見の「た」に関するさまざまな先行研究の違いは、主に3点にまとめることができる。以下、1点ずつ紹介して論じる。

3.5.1. 発見の「た」に期待は必要か？

第1点は、期待（たとえば、さがしていた本をカバンの中に発見して言う文(6)「あ、あった」の場合なら「本はここにありはしないか」といった気持ち）の有無がどの程度重要かどうか、という点である。たとえば通勤列車の中で、向かいの座席の人間の顔を何気なく見てほくろを発見した場合、（こっそり、あるいは心内で）文(21a)のように言えても、文(21b)のようにふつう言いにくい。

- (21) a. あ、あんなところにほくろがある！
 b. あ、あんなところにほくろがあった！

このことからすれば、期待がまったくない、思いがけない発見の場合は、発見の「た」は使いにくいように思える。実際そのような記述もある（三上(1953:224-225)・寺村(1971, 1984:341-342)・寺村(1984:106)・松田(1998)・益岡(2000:27-28)・井上(2001:144-145)）。だがその一方で、たとえば次の文(22)のように、

- (22) あ、こんなところに本があった。

期待がなくても発見の「た」が自然である旨が指摘されてきている（紙谷(1979:20)・高橋(1983, 1994:179-180)・松田(1998:72-74)・益岡(2000:25-

26))。

このような記述の食い違いは、「期待」という名で異なる2つの概念(期待・探索意識)を漠然と指してしまったことから生じている。発見の「た」に必要なのは期待ではなく、探索意識である。第3.2節の観察はこのことをよく示している。自宅で思いがけずサルを発見して家人に知らせる場合、文(16)「ほら、あんなところにサルがいたよ」は不自然である。だが、この不自然さは、自宅にいる話し手が「もしかしたらサルがいるかもしれない」といった期待を抱いていなかったから、という形では説明できない。話し手がこの期待を抱いていないにもかかわらず、文(16)が自然な場合があるからである。それは山中で思いがけずサルを発見し、同行している友人にそれを教えるという場合である。自宅と山中の違いは、「どんな様子なのか?」という探索意識の持ちやすさの違いである。松田(1998:76)は、カバンの中に本を発見して「あ、本があった」と言うために必要なのは、「もしかしたらどこかに本があるかもしれない」というような軽い期待である旨述べているが、そのような期待がなくても(遡及的に作られたものであれ)「カバンの中はどんな様子なのか」という探索意識さえあれば「あ、本があった」は自然である。文(21b)「あ、あんなところにほくろがあった」がふつう不自然なのは、通勤列車でたまたま向かいに座った人間の顔に対して、ことさらに「この人はどのような顔をしているのだろうか」と探索意識を持つこと(そしてそれを露わにすること)が不自然だからであり、仮にこのような探索意識を持ったという場合さえ想定してしまえばこの文は十分自然になる。

3.5.2. 発見の「た」はどんな述語に付いて現れるか?

いま述べた第1点と関わるが、先行研究の立場が分かれる第2点は、発見の「た」が現れる文の述語として、何を認めるかという点である。どのような説でも認めている述語は「ある」「いる」である。述語を「ある」「いる」以外にも認める説では、「あ、こんなところにとげがささってた」のような、多少の様態描写を含んだ存在述語(今の例なら「ささってる」)が認められ

やすい（たとえば高橋（1985:295）・金水（2001:62））。さらに名詞+「だ」や形容詞（たとえば寺村（1984:106））、「あ、鍵がかかった」のような必ずしも存在とは関わらない動詞の「ている」形（岩崎（2000:32））までが挙げられることもあるが、中心は存在表現であるという印象は動かしがたい。このように、発見の「た」は特に存在表現と強く結びつくと考えられているようだが（特に紙谷（1979:21）を参照）、それがなぜなのかという問題はこれまで論じられていない。本稿は第3.3節でこの問題を文型の問題としてとりあげ、「マイクロ探索は一瞬でおこなわれるため、得られる情報が最も基本的な存在情報にかぎられやすい」という形で解答を与えた。

発見の「た」は（筆者の言葉でいえば）静態的な命題表現にしか現れない、という旨の指摘がなされることがある（たとえば紙谷（1979:21）・金水（1998:177）・岩崎（2000:32）・益岡（2000:29））。上に挙げた述語「ある」「いる」「ささってる」「かかっている」や名詞+「だ」、形容詞はすべて意味が静態的であるから、ここまでは指摘のとおりである。問題は、たとえば、それまで笑っていなかった赤ん坊が笑い出した場合、いまも笑っている赤ん坊の笑顔を目の前にしながら「あ、笑った」と言えることである。述語「笑う」の意味は動態的であるから、もしこの「た」を発見の「た」に含めれば、上の指摘は不当となる。井上（2001）は「あ、笑った」の「た」が「あ、あった」の「た」と同じく「発話時以前のある時点で観察された状態 p を、発話時における同一の状態 p から切り離して独立に叙述する（前景化させる）」というメカニズムで生じることを示しつつ、「あ、笑った」の「た」を発見の「た」とはしていない。本稿では井上（2001）の論を認めた上で、その帰結として「あ、笑った」の「た」も発見の「た」と認める。もちろん、発見の「た」が現れる典型的な場合とは、述語が存在表現「ある」「いる」の場合であるから、その意味では「静態的な命題表現」という傾向はあるかもしれないが、周辺的な場合として、述語が「笑う」のような動態的な表現の場合も認める、したがって「あ、笑った」の「た」も探索体験の時点が過去であることを表すと考える、ということである。というのは、2つの事柄を説

明する上で、この考えが有効だからである。

第1の事柄とは、問題の「た」は場面によって不自然になるということである。たとえば、喫茶店に来て座席に座った時には床は乾いていたのに、友人との雑談に夢中になっているうちにいつのまにか漏水で水が流れだしたという事例を考えてみよう。いまも水が流れている床を見ながら「あ、水が流れてる」などと言うことは自然だが、「あ、水が流れた」と言うことはふつう不自然である。では、赤ん坊の事例の場合は「あ、笑った」と言うことがなぜ自然であり、喫茶店の事例の場合は「あ、水が流れた」と言うことがなぜ不自然なのだろうか？ この問題は、問題の「た」が発見の「た」であり、探索という体験の時点が過去であることを表していると考えれば、次のように説明できる：喫茶店の事例と赤ん坊の事例の違いは、探索意識がどの程度自然に想定できるか、したがって探索がどの程度自然に想定できるかの違いである。喫茶店の床がどのような状態か、と気にすることはもちろんあり得るし、そういう状況を想定すれば「た」の自然さは高くなるが、そういう想定は一般的ではない。つまり探索があまり自然に想定できない。これに対して、赤ん坊の表情は「どうだろうか」と気にすることがより自然なので、赤ん坊の事例は探索がより自然に想定できる事例と言える。このように、問題の「た」の文は探索なしには成立しない。問題の「た」の文が表す知識（たとえば「赤ん坊が笑う」）は、探索体験に由来するものである。

『あ、笑った』の『た』は発見の『た』であり、探索体験の時点が過去であることを表す」という考えで説明できる第2の事柄とは、井上（2001）が観察しているものである。井上（2001）の観察を具体例に則して紹介すると、これは、いまも笑い続けている赤ん坊を目の前にしながら「あ、笑った」と「た」の文を発することができるのは、赤ん坊が最初笑っていなかったことを見ていた話し手にかぎられる、というものである。たしかに、赤ん坊が笑い続けている段階ではじめてその場に現れた者なら「あ、笑ってる」などとは言えても「あ、笑った」とは言えないので、この観察は妥当と言える。そして、このような話し手の制限は、「笑う」のような「た」のない場合に

は見られないので（赤ん坊が笑っている段階ではじめてその場に現れた者でも「しかしこの赤ん坊は（よく）笑うね」などと言える）、この制限は「た」に関係するものである。では、この制限は「た」にどう関連しており、なぜ生じるのだろうか？ この「た」を発見の「た」と認めて、探索体験の時点が過去であることを表していると考えれば、この問題は次のように説明できる：この「た」が探索に関わっていることは、上述した喫茶店の床の事例から明らかである。いまも笑っている赤ん坊を目の前にしているわけであるから、この探索はマクロ探索ではなくマイクロ探索である。一瞬一瞬細かなマイクロ探索を続ける中でとらえられる動的な動作があるとすればそれは、[笑う]という力の発現（これが動作動詞「笑う」の通常の意味）ではなく、状態変化でしかありえない。つまり、状態[探索領域に情報[赤ん坊が笑う]がない]から状態[探索領域に情報[赤ん坊が笑う]がある]への、状態変化である。だからこそ、初期状態[探索領域に情報[赤ん坊が笑う]がない]を持っていない話し手は、笑っている赤ん坊を目の前にしても「あ、笑ってる」のように言えても、「あ、笑った」のように言えない。もちろん、誰でも生まれた時から笑い続けているはずはなく、この赤ん坊も時間をさかのぼれば、笑っていない状態が必ずあるには違いないが、だからといって「あ、笑った」が無制限に言えるわけではなく、話し手に制限が生じるのは、話し手は赤ん坊の笑っていない状態を、（推論ではなく）探索によって得る必要があるからである。

以上の理由から、本稿は「あ、笑った」の「た」は発見の「た」であると考える。発見の「た」は、マイクロ探索の中で見いだされる状態変化の表現にかぎって、動態表現にも現れ得る。

「発見の『た』は静態的な命題表現にしか現れない」という考えにとっての問題をもう1つ挙げるとすれば、それは動詞「来る」に関する問題である。たとえば、バス停でバスを待っている話し手は、遠くに見えてきたバスを発見して（バスはまだバス停に着いていないにもかかわらず）「あ、来た」と言うことができる。この「た」を上赤ん坊の場合などの「た」と区別する

か（高橋（1983, 1994:170）¹⁷）、しないか（益岡（2000:28-29）・岩崎（2000:37, 注13））に関して先行研究は分かれる¹⁸。

しかし、両説が注目しているものは同じものだろうか？ たとえば、いまのバス停の事例で、遠くにバスを見かけた瞬間に「あ、着いた」と言うことは「あ、来た」と違ってふつう不自然である。その一方で、辺鄙な某国で国際バスを何ヶ月も待ち続け、バスはまだ来ないか、またあの国あたりで内紛でもあったのか、いまごろバスはどの国を走っているのだろうか、などとバスの壮大な走行ルートに思いを馳せ、さんざん悩んで待ち続けてきた暁に或る日、ついにバスが遠くに姿を現した、という状況を考えれば、「ああ、とうとうバスが来た。ようやく、ここに来た」が自然だけでなく「ああ、とうとうバスが着いた。ようやく、ここに着いた」などと、「着いた」を発することも先の状況と比べれば相対的に自然になる。つまり、「あ、来た」を自然にする動機としては、「あ、来た」だけを自然にする動機と、「あ、来た」「あ、着いた」をともに自然にする動機がある。従来の2説はそれぞれ別の動機に着目していたのではないか。「あ、来た」「あ、着いた」をともに自然にする動機は、「モノの到来を待望する気持ちが強い場合、そのモノが到来するまでの移動ルートが強く意識され得る。その移動ルートが壮大であるほど、現実の小さな距離は無視されやすい」と考えることができる。なかなか来ない国際バスに乗りたいために、その壮大な走行ルートを強く意識した話し手にとっては、遠方に見えるバスと自分のいるバス停とのせいぜい数キロの距離は十分小さく、無視できる。類例は他言語にも見られる。ジックフックスによれば、クロアチア語の文頭で使われる間投詞的な指示詞“evo”は、本来は話し手に近い距離を表すが、モノが話し手の視野に入ってきた段階で（つまりモノとの距離が遠い段階で）使うこともあり、その際、驚きや期待の意味が生じる（Zic Fuchs（1996:58））。中国語にもこれと似た面がある。中川正之氏が指摘されるように「あと5分で首都空港に着陸します」という機内放送を聞けば中国語（普通話）では“北京到了”（北京に来た）と言える。これらも、上の動機による現象と言えるだろう。このような動機に着目

すれば、「あ、来た」の「た」は「あ、笑った」の「た」とは別物ということになる。他方、「あ、来た」だけを自然にする動機としては、「モノの到来を待望する気持ちが強い場合、人間は探索可能領域に注意を向けがちである」という事情を考えることができる。バスは、話し手の探索可能領域（バス停にいる話し手からバスの姿が見えたり、バスの走行音が聞こえたりする領域¹⁹）の外から内へという状態変化を起こしており、動詞「来る」は、状態〔探索領域に情報〔(バスが)来る〕がない〕から状態〔探索領域に情報〔(バスが)来る〕がある〕への変化を意味する。したがってこの動機に着目すれば、「あ、来た」も「あ、笑った」と同じく、探索意識に基づくマイクロ探索の中で見いだされる状態変化を意味しており、区別は必要ないということになる。

3.5.3. 発見の「た」は過去を意味するか？

先行研究が異なっている第3の点は、発見の「た」の意味である。発見という話し手の態度を表すということを否定する説は存在しない。問題は、発見という態度的意味をいかに導き出すかであり、態度的意味を過去概念とは関わらない形で導き出す説がある一方で、過去概念経由で導き出す説もある。

態度的意味を過去概念とは関わらない形で導き出す説は、研究者ごとに内容がかなり違っている。まず高橋（1985:295）は、「あきらかに現在のことを過去形であらわすばあい」一般について、「過去性がなくなる」と述べている。森田（1995, 2001）によれば、そもそも「た」の意味とは過去や完了ではなく確述意識（対象について間違いなくそうであるという話し手の気持ち）であり、そこから過去・完了や、発見その他の態度が生じる。この立場から森田（1995:306）では、発見の「た」他について「いずれも時制とは関係の無いところでの「た」である」と述べられている。また、尾上（1982, 2001:376-377）では発見の「た」が、完了という意味につきまとう確認の気分が独り歩きしたものであり、（過去はもちろん）完了という意味は喪失していると述べられている。紙谷（1979:22-23）では、発見の「た」の意味は

完了に由来するとされている。

他方、発見という態度的意味を過去概念経由で導き出す説としては、三上 (1953:224-225)・岩崎 (2000)・井上 (2001)・金水 (1998, 2000, 2001) がある。金水 (2000, 2001) では問題の「た」が、基本的にテンスの機構の内部にあるとされつつも (金水 (2001:55)), 過去というよりはパーフェクト相的な「た」とされているが (金水 (2000:65))²⁰, このように問題の「た」の意味が厳密にいつて過去なのか, それともパーフェクト相的なものなのかという論点には, 本稿は触れる余裕がないので金水説もここに含めておく。これらの説によれば, 発見の「た」は命題成立時点が過去であることを表さないが, 命題情報獲得時点が過去であることを表す。たとえば井上 (2001) によれば, 文 (2)「あ, あった」の話し手は, 発話の一瞬前に観察した状態 [(本がカバンの中に) ある] を, 発話時においても成立し続けている同一の状態 [(本がカバンの中に) ある] から切り離して独立に叙述している。つまり, 観察された状態 [(本がカバンの中に) ある] は発話時の一瞬前とはいえ過去のものであるので, 過去を表す「た」が使えるという説明である。

この第3節で論じたことが示しているのは, 発見の「た」がさまざまな文脈に応じて自然になったり不自然になったりすることを説明するには, 発見という態度的意味を直接導き出す前者の説よりも, 過去概念を経由して導き出す後者の説の方が有効だ, ということである。

その上での話だが, 最後に後者の説を1箇所, 補強しておきたい。後者の説によれば, 発話時の一瞬前は過去に位置づけられる。このことには, それなりの説明が必要であろう。というのは, 一瞬前を現在ではなく過去とするというこの厳密な感覚は, われわれの日常感覚からかけ離れているからである。われわれの日常的な言語使用の場ではふつう, 一瞬という時間差はゼロに等しい。たとえば乾燥した冬の日に金属製のドアを開けようとノブに触れた瞬間, 感電してしまい, 反射的に手を引っ込めて「痛い!」と叫ぶことがある。「痛い!」と言っている時点でもう手に痛みは残っていないという場合でも, これはあり得る。この場合, 痛いのは発話の一瞬前だが, 反射的に

手を引っ込めて「痛かった！」と叫ぶのは不自然である。一瞬というわずかな時間差にこだわって過去表現「痛かった！」を選択するのは不自然であり、むしろ、一瞬という時間差を無視して現在表現「痛い！」を選択する方が自然である。このことからすれば、一瞬の時間差が感電などの場合には無視されるべきものであるのに、文(2)「あ、あった」のような発見の「た」の場合には無視できないということは、説明の必要があるだろう。そして、この第3節の論は、次のような説明を与えてくれるものである。

そもそも発見の「た」の文が表しているのは、探索という体験由来の知識であって、体験じたいではない。このことは、たとえば「どこかに手帳はないか?」「ここにありました」のような対話を考えてみるだけで理解できる。相手の問いが手帳の所在を話題にしている以上、自分の個人的な体験では返答にならない。文「ここにありました」が表しているのは、個人的な体験ではなく、手帳の所在という共有可能性の高い知識である。但しその知識は探索という体験由来のものであり、話し手は探索体験時をアクセスポイントとしてその体験情報にアクセスし、それをもとに知識を表現するというのが、この節で中心的に論じてきたことである。話し手は一瞬前の探索という体験をそのまま体験として言語表現しているのではなく、一瞬前の探索という体験を、知識に加工して言語表現している。一瞬の時間差が無視できないのは、その時間差が物理的には一瞬とはいえ、話し手の心内で動機づけられたものだからである。話し手が心内でおこなう「探索という体験」[知識の言語表現]という2つの作業は、体験関連か知識関連かが異なっており、同一視しにくいので、2つの作業にまたがる時間差は、たとえ物理的にはどれほど短くても無視しにくい。これに対して、感電して反射的に手を引っ込めつつ叫ぶ言葉として「痛かった！」が不自然で、つまり一瞬の時間差が無視されるのは、この場合は一瞬前の体験をそのまま体験として表現しようとしているからである。

4. 思い出しの「た」：「彼の電話番号はこの番号だったかなあ」

たとえば記憶をさぐりながら他人の電話番号を思い出す、あるいは思い出そうとする場合に発せられる文(23)を見てみよう。

(23) [思い出しながら] 彼の電話番号はこの番号だったかなあ。

話し手が問題にしているのは話題の人物の過去の電話番号ではなく、現在の電話番号であるから、文末に現れている「た」は、「『た』は命題の成立時点が過去であることを表す」という考えでは説明できない。この「た」のような、思い出しという話し手の態度と深く関わると思える「た」は、思い出しの「た」・想起の「た」などと呼ばれることが従来からあった。本稿でもこれを、思い出しの「た」と便宜的に仮称する。

第2.2節でピサの斜塔の事例を使って示したように、話し手が情報を即座にとり出せないという事情は、「た」の自然さに影響する。「600年前といえばピサの斜塔はこうこう」と思い当たることのないのび太は、ドラえもんの提案に対して「そりゃあいいや！ 600年前ならピサの斜塔も新しかったからね」とは言いにくい。そして、このことを説明するには情報のアクセスポイントという概念が有効である。のび太にとって、600年前のピサの斜塔に関する情報は、「600年前の時点」というアクセスポイントからはアクセスしにくく、むしろ現在という別のアクセスポイントが選ばれる。これに対して、思い出しの「た」の場合は、表現される知識情報（たとえば彼の電話番号）が必ずしも過去の事物に関するものに限られないという点で、ピサの斜塔の事例とは異なっており別物である。しかし、話し手にとって当該の知識情報がアクセスしにくいという根本的な事情を含んでいる点では、上の事例とよく似ている。現在成り立っている知識情報（現在の彼の電話番号）をすぐに思い出せないということは、現在というアクセスポイントがうまく働かないということである。そこで、その知識情報に触れた過去の時点（彼の電話番号を見聞きした時点）が次善のアクセスポイントとして選ばれる。このアク

セスポイントは過去なので「た」が用いられる。それが思い出しの「た」である（図5を参照）。

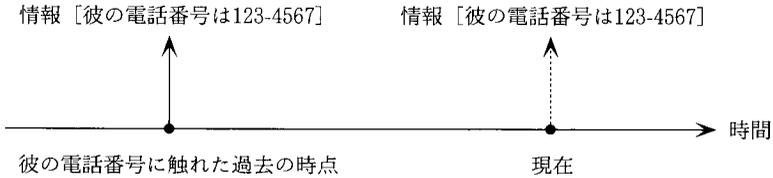


図5：思い出しの「た」は話し手が知識情報に触れた時点が過去であることを表す。

思い出しの「た」については、用法の観察は諸説の検討とあわせておこなう。諸説の異なりは主に3点にまとめることができる。以下1点ずつ紹介して論じる。

4.1. 思い出しの「た」としてどこまでを認めるか？

諸説が異なっている第1点は、思い出しの「た」としてどこまでを認めるか、という点である。これは具体的には2つの問題を含んでいる。1つ目は、思い出すのが自分か、聞き手かで区別をするかという問題である。高橋（1985:217）は思い出しの「た」を、「存在を思い出したときに、すぐそれをのべる」と狭くとらえており、「きょう職員会がありましたね」の「た」を別項目（「確認」）に分けているが、高橋（1983, 1994:180）では一括している。本稿でも両者を一括して思い出しの「た」とする。2つ目は、実際の思い出しを伴わない、儀礼的なものを区別するかという問題である。相手の名前を実際には知らなくても「お名前は何とおっしゃいました」のように言い、既に知っている（したがって思い出し可能）という気持ちを表すことが敬意になると三上（1953, 1972:226-227）は述べ、この「た」を思い出しの「た」とは区別しているが、金子（1995:249）がこれを、知ったかぶりの「た」と呼び、「ただのてらいであったり、あるいはある種の丁寧表現であったりする」と述べるように、敬意表現につながるのは可能性の一つにすぎないだろ

う。本稿ではこれも思い出しの「た」に含める。金子（同）は寺村（1984）の「忘れていた過去の認識を思い出す」という観察を批判し、かつて知っていたことを思い出すことに本質は決してなく、むしろそれを思わせぶりに言いなすことにあると述べる。が、これについては本稿は寺村（1984）と同じ立場をとる。どのような意図であれ、また実際の思い出しを伴うかどうかにかかわらず、話し手が思い出しという態度に関係づけて発する「た」はすべて思い出しの「た」と呼ぶ。そのかぎりにおいて、思い出しの「た」が「忘れていた過去の認識を思い出す」という話し手の態度に関わるという考えは正しい。その態度が或る特別な表現意図のもとにもくろまれたものである、あるいは偽装であるということは、別のレベルでの話と理解すべきだろう。

4.2. 思い出しの「た」はどんな命題表現に現れるか？

第2点は、思い出しの「た」がどのような命題表現に現れ得ると考えるか、という点である。金水（1998:177）・岩崎（2000:32）は、思い出しの「た」は静態的な命題表現にのみ現れ得ると述べる。これを筆者の例でいえば、たとえば文（24a, b, c）などが自然である一方で、文（24d）が不自然であるように、

- (24) a. そうそう、明日は2時から会議があった。
 b. そうそう、明日は2時から会議に出る予定だった。
 c. そうそう、明日は2時に会議に出るんだった。
 d. そうそう、明日は2時に会議に出た。

思い出しの「た」が現れるのは、静態的な命題表現（上の例なら [明日は2時に会議がある] [明日は2時に会議に出る予定だ] [明日は2時に会議に出るんだ]）にかぎられており、動態的な命題表現（[明日は2時に会議に出る]）に現れないという考えである。

この説と異なる考えとしては、紙谷（1979:22）を挙げることができる。

紙谷（同）は次の文（25）（26）の2例を挙げて、

（25） 今晚の会は八時にはじまりました。

（26） あすはどちらへおでかけになりました？

「発見」のばあいのような動詞の種類による制約はないようである」と述べている。（もちろん文（25）は会の前に発話されているものとする。）だが、本稿では文（25）（26）のようなものは例外的なものとして扱い、金水・岩崎説を原則として認める。その理由はまず第一に、筆者が周囲に確かめたところでは、文（25）（26）が自然だとは必ずしも判断されないということである。第二に、文（25）（26）は特別な事情を持っているということである。つまり、たとえ文（25）（26）を自然と考えたところで、それを動的な命題表現に一般化できるとは思えないということである。文（25）を思い出しの「た」の文として解釈できる話者は、「八時」の部分を中心ととらえる。この解釈によれば、話し手は今晚、会があるということをも前提にして、その開始時刻を問題にしており、その点で文（25）の意味は「今晚の会がはじまるのは八時でした」という静態的な命題表現に近い。文（26）の意味も「どちらへ」の部分を中心とした前提—焦点構造であり、さらに尊敬表現「～になる」じたいがかなり静態的である。文（25）（26）が話者によっては自然であるとしても、その原因はこのような特別な事情によるものであって、思い出しの「た」が動的な命題表現一般に現れるわけではない。

習慣のような、かなり静態的な意味を持つ命題表現に思い出しの「た」が現れ得ると考えるかどうかは、研究者によって意見が異なる。たとえば三上（1953, 1971:226）が文「油絵をお描きになりましたね？」を挙げ、尾上（1982, 2001:374）が「きみはたしか、たばこは吸ったね」のような文を挙げてこれを認める一方で、寺村（1984:107-8）は類似の文「君、ビール飲んだね」を、思い出しの「た」の文として認めていない。「君、ビール飲んだってね」のように、「飲む」に「ん」（「の」）を付けて名詞化し「だ」を統

けなければならないと述べている。だが、本稿では三上（1953, 1971）・鈴木（1965）・尾上（1982, 2001）と同様、思い出しの「た」を広く認める。文「キリンってたしか、鳴いたよね?」「[受験生2人の1人がもう1人に]ねえねえ、引力って、距離の2乗に反比例したっけ?」のような習性（[キリンが鳴く]）・法則（[引力は距離の2乗に反比例する]）を表す命題に現れる「た」も、習慣の場合と同様、思い出しの「た」に含めておく。その上で本稿は、紙谷（1979）の挙げる前提—焦点構造の文(25)(26)にせよ、習慣・習性・法則を表す文にせよ、かなり静態的な意味であることを認める。

では、思い出しの「た」はなぜ、基本的に静態的な命題表現にしか現れないのだろうか？ それは、知識というものはすべて静態的だからである²¹。第3節で見た発見の「た」はこの点で異なっており、動態的な命題表現にも現れ得るが、それは発見の「た」の文が知識を表すとはいえ、その知識は探索という体験に由来するもので、さほど知識らしくはないからと考えておく。

4.3. 思い出しの「た」は過去を意味するか？

思い出しの「た」について諸説が分かれる点の3つ目は、思い出しの「た」の意味をどう考えるか、という点である。話し手の態度（思い出し）を意味するということを否定する説はない。問題は、この態度的意味をどのように導き出すかである。発見の「た」の場合と同様、ここでも諸説を、態度的意味は過去概念と関わらないとする説（「非過去説」）、関わるとする説（「過去説」）に分けて紹介するが、説の分布状況は発見の「た」の場合とあまり変わらない。

非過去説の金田一（1976:32-33）は、思い出しの「た」は過去でもないしアスペクトでもなく、話し手にとって主観的な事柄だとしている。高橋（1985:295）と森田（1995:306）は発見の「た」と思い出しの「た」を一括して論じる。つまり発見の場合と同様、思い出しの「た」の場合も、高橋（1985:295）は「た」の意味に過去性がないとし、森田（1995:306）は「時制とは関係の無いところでの『た』である」と述べている。尾上（1982,

2001:376-377) では、思い出しの「た」は、過去という意味につきまとう回想の気分が独り歩きしたもので、過去という意味は喪失していると論じられている。これはちょうど発見の「た」が、完了という意味につきまとう確認の気分が独り歩きしたもので、完了という意味は喪失していると考えられているのと並行している。紙谷 (1979:22-23) も、発見の「た」の意味を完了から派生させたのと並行的に、思い出しの「た」の意味は過去に由来すると述べる。したがって紙谷 (1979) は思い出しの「た」については過去説に立つ。発見の「た」の場合と同様、三上 (1953)・岩崎 (2000)・井上 (2001)・金水 (2001) も過去説に立つ。さらに金子 (1995:250-251) も過去説に立つ。本稿も過去説である。それは、すでに示してきたように、思い出しの「た」の用法 (動態的な命題表現には現れにくいこと) を、類似すると思われる現象 (ピサの斜塔の事例で「た」が現れにくいこと) とあわせて説明する上で、過去説が有効だからである。過去の事物 (600年前のピサの斜塔) に関して現在成り立つ知識情報を表現する際には、アクセスポイントとして過去・現在の2通りがあり、どちらが選ばれるかは話し手の知識状態に影響される。これに対して、思い出しの「た」の場合は、表現される知識情報が必ずしも過去の事物に関するものに限られないという点で、ピサの斜塔の事例とは異なっており別物だが、話し手にとって当該の知識情報がアクセスしにくいという根本的な事情を含んでいる点では、上の事例とよく似ている。現在成り立つ知識情報をすぐに思い出せないということは、現在というアクセスポイントがうまく働かないということである。そこで、その知識情報に触れた (その知識情報を覚えた、活用した、意識した) 過去の時点が次善のアクセスポイントとして選ばれる。アクセスポイントは過去なので「た」が用いられる。それが思い出しの「た」である。

過去説によれば、思い出しの「た」は発見の「た」と同様に、命題成立時点が過去であることを表さない代わりに、命題情報獲得時点が過去であることを表す。たとえば井上 (2001) によれば、文「そういえば、そういう本がありましたねえ」の話し手は、発話以前に観察した状態 [そういう本がある]

を、発話時においても成立し続けている同一の状態 [そういう本がある] から切り離して独立に叙述している。つまり、観察された状態 [そういう本がある] は発話以前のものなので、過去を表す「た」が使えるという説明である。では話し手が、発話以前に観察した状態を、発話時現在の同一状態からわざわざ切り離して表現するのはなぜか？ これは、現在成り立つ知識情報にアクセスするのに、現在というアクセスポイントがうまく働かず、その知識情報に触れた過去の体験時点がアクセスポイントとして選ばれる結果である。では、思い出しの「た」は発見の「た」とどこが違うのか？ 発見の「た」を成立させるのは探索という発話に先立つ体験だが、思い出しの「た」はアクセスポイントの不具合によって生じる。

書物や講演でも、或る箇所で「PはQである」と論じられると、それ以降の箇所では同じことが「さて、PはQであった」などと「た」を使って述べられることがある。これはふつう、書き手や講演者が話の内容を一時的に失念して、思い出しているのではない。むしろ多くの場合、受け取り手（読者・聴衆）の思い出しを想定した表現である。他の話題からPの話題へと話題が戻った際に、以前Pについて受け取り手が登録したはずの知識 [PはQである] を受け取り手に思いださせるよう、「た」を使って受け取り手の思い出しを支援していると言える。

5. 知識修正の「た」：「正解はCでした」

たとえばテレビのクイズ番組で、司会者が解答者に或るクイズの正解を告げる場合に発せられる文 (27) を見てみよう。

(27) 正解はCでした。

当該のクイズの正解がCであることは現在成り立っている。時間を問わず成り立っているとも言えるが、少なくとも、現在をさしおいて過去の一時点について語っているという意識は話し手（司会者）にはない。それにもかかわ

らず、文(27)の文末には「た」が現れている。この「た」も、『た』は命題の成立時点が過去であることを表す」という考えで単純に説明できるものではない。

文(27)が自然に発せられる文脈として、思いつきやすいのは、クイズ解答者が「A」などと解答している誤答の文脈や、クイズ解答者が「わかりません」と言う解答不能の文脈である(「残念! 正解はCでした」)。クイズ解答者が「C」と解答している正答の文脈でも、司会者が文(27)を発することは可能だが(「その通り。正解はCでした」)、この文脈では「た」のない文がふつうで(「その通り。正解はCです」)、「た」の文はそれほど思いつきやすくはない。このことから考えられるのは、文(27)の「た」が、知識の修正という話し手の態度と深く関わっているということである。そもそも本稿でいう「知識」は、第2.2節でことわったように、[正解はAだ]だけでなく、[正解はAにちがいない][正解はAだろう][正解はAかもしれない][正解は……]のようなさまざまなものを含んでいる。「A」などと誤答しているクイズ解答者や、解答不能のクイズ解答者も、当該の問題について自分なりの知識を持っていると言える。したがって誤答や解答不能の場合、司会者の「正解はCでした」はその知識を修正させる発話と言って差し支えない。これに対して正答の解答者の場合は、その知識の確信度の高さに応じて、知識の修正と考えることに問題が出てくるので、「た」の文は思いつきにくい。この「た」のように、知識を修正するという態度と深く関わると思える「た」を、本稿では知識修正の「た」と便宜的に仮称する。

知識修正の「た」の存在を最初に指摘したのは金水(1998:170)だが、くわしく論じられているわけではなく、この「た」に少しでも触れているものも他に岩崎(2000:37,注8)・井上(2001:146-150)ぐらいで、かぎられている。実質的に論じているのは井上(同)だけである。井上(同)は上の例(27)のような「た」の用法を、「隠していた正体を明かす」用法と呼ぶ一方で、「なんだ、こんなところにあったのか」のような「～た(の)か」を「発話時以前の認識の修正・補強を表す」用法と呼び、両者を区別している

が、この区別は説明の便宜のためだろう。井上（2001:150）自身が論じるように、修正・補強の対象が話し手の認識であるか（前者）、聞き手の認識であるか（後者）の違いであるから、ここでは両用法の「た」をともに知識修正の「た」としておく。

井上（2001）では、知識修正の「た」は認識や推論の時点が過去であることを表すとされており、この「た」の意味を過去概念から導き出す説（過去説）が展開されている。過去概念と関わらないとする説（非過去説）は見あたらないが、そもそも論じているのが井上（2001）だけという状況であるから、「過去説に異論なし」と見なすわけにはいかない。そこで以下では、過去説の優位性を4点に分けて示す。第1点は、井上（2001）の分析は、話し手の知識更新という観点から考えてももっともだということである。第2点は、前述の「思いまどい効果」が生じる理由を、過去説が説明してくれるということである。第3点と第4点は、知識修正の「た」の用法を説明する上で非過去説が有効でないということである。（但し第4点については、過去説が有効であることは次の第6節で示す。）

5.1. なぜ認識や推論の時点の問題にするのか？

すでに述べたように、井上（2001）では、知識修正の「た」は認識や推論の時点が過去であることを表すとされている。では、知識修正の「た」を発する話し手は、なぜ認識や推論の時点をことさらに問題にし、それが過去時点であることを表すのだろうか？ この問題には、話し手の知識更新という観点から次のような説明を与えることができる。

人間はしばしば、心内の知識を更新する。この更新という行動は、古い知識（確固とした信念から漠然とした思いまでいろいろある）の登録内容を抹消し、その位置に、より見込みのありそうな新しい知識を登録し直すという、登録内容変更という形でおこなわれる。したがって、話し手が知識の更新を表現する場合、まず、古い知識情報の登録内容を抹消するため、アクセスポイントとしては、古い知識情報の登録時点が選ばれる。これは当然、過去で

あるから、結果として、知識の更新が表現される場合は文末には必ず過去の「た」が生じる。

5.2. なぜ思いまどい効果が生じるのか？

過去説は、筆者が「思いまどい効果」と呼ぶものをも、うまく説明してくれる。すでに述べたように、思いまどい効果とは、事前の思いまどいによって問題の「た」の自然さが高くなるという効果である。たとえば第3.3節で述べたように、大きなサルを目の前にしての文(18)「大きかったな～」はふつう不自然だが、サルを見る前に「この時期、この山のサルは大きいか？」などと、話し手が友人と議論したり、自分で思案したりして思いまどっていれば、「なんだ、大きかった」「ほら、やっぱり大きかった」のように自然になる。この「た」については発見の「た」として第3.3節で説明したが、話し手の重点の置き方によっては知識修正の「た」にもなり得るので、ここでも説明を加えておく。この「た」が発見の「た」になるのは、アクセスポイントとして発話直前の探索時点が選ばれる場合であり、それは話し手が自身の探索体験に重点を置いて言語表現をおこなう場合である。表現される言語情報がもう少し知識寄りになり、自身の探索体験よりも、知識の更新に重点が置かれれば、アクセスポイントとしては古い知識の登録時点が選ばれ、「た」は知識修正の「た」になる。サルを目の前にした話し手が、古い知識（[この時期、この山のサルは小さいだろう]あるいは[この時期、この山のサルは大きいはず]あるいは[この時期、この山のサルは大きいか小さいか不明]など）を新しい知識（[この時期、この山のサルは大きい]）に更新することを意識すれば、廃棄される古い知識の登録時点、つまり思いまどいの時点は過去なので「た」が現れて不思議はない（図6を参照）。



図6：古い知識（[正解はA] [サルは大きいはず／小さい／大きさ不明] など）を新しい知識（[正解はC] [サルは大きい]）に更新することを話し手が意識すれば、古い知識の登録時点（過去時点）をアクセスポイントとして古い知識が新しい知識に更新される。知識修正の「た」は古い知識の登録時点が過去であることを表す。

第3.1節で述べた事例も同様である。殺人事件の目撃者が文(8)「犯人は右手の指が一本ありませんでした」の形で証言したとしても、それを聞いた聞き込み捜査員がそのまま上司に(9)「デカ長、新情報です。犯人は右手の指が一本ありませんでした」と報告することは、あまり自然ではない。だが、聞き込み捜査をする前に捜査員と上司が「犯人は右手の指が欠けているんじゃないでしょうか」「いやどうかなあ」などと、犯人の身体状況について事前に思いまどっていれば、「デカ長、やっぱり犯人は右手の指が一本ありませんでした」のような報告は自然である。この「た」も、新しい知識[犯人は右手の指が一本ない]にとって代わられる古い知識（[犯人は右手の指が欠けているのではないか]あるいは[犯人は右手の指が欠けているかどうか、わからない]など）の登録時点が過去であることを表すと考えることができる。

クイズの番組で司会者が、正解がCである問題について「残念！正解はCでした」と言え、解答者や視聴者が「Cだったのか」と言えるのも同様で、問題の正解を思いまどう過去の時点がアクセスポイントになっている。

このような「た」は、「実は…」のような、知識を修正する、あるいは真相を語るという態度を表すと考えてしまえば、非過去説でも説明可能と言えるかもしれない。だが、「ではなぜ『た』は、人間のさまざまな態度のうち、

『実は…』のような真相を語る態度を特に表すのか?』という根本的な問いには答えることができない。

5.3. 「た」の位置と参与の度合い

知識修正の「た」の用法をくわしく見ると、非過去説で説明しきれないものがある。この第5.3節と次の第5.4節ではこのことを具体的に示す。ここでは、知識修正の「た」の現れる位置によって、話し手の参与の度合いが異なることを指摘しておく。

たとえば、或るドラマの一場面を考えてみよう。この場面では、家族がテレビを観ている。テレビではクイズ番組が放映されている。いま「カマキリは飛ぶでしょうか? 次の選択肢から答を選びなさい。①飛ぶ。②飛ばない」というクイズが出題された。その家族はさっそくこのクイズについて「飛ぶだろう」「いや、飛ばないよ」、あるいは「①だな」「②だね」などと話し合うとする。これを観ているドラマの観客も、同様にこの問題についてさまざまな解答を浮かべるだろう。この時、ドラマのナレータが登場し、(28a)や(28b)のようにナレーションをはさむことによって、ドラマの観客に真相を告げる(ドラマの観客の知識を修正する)ことは自然である。

(28) a. 実は、カマキリは飛ぶのであった。

b. 実は、答は①なのであった。

いまはドラマのナレーションとして例を述べたが、小説の地の文であっても同様に(28)は自然である。

ところが、ドラマのナレータではなく、このクイズ番組の司会者が正解を明かすセリフとしては、文(28a)は不自然である。たとえ丁寧な口語体で「実はカマキリは飛ぶんでしたねえ」などと改めてもこの不自然さは解消されない。文(28b)も同様で、丁寧な口語体で「実は答は①なんでしたねえ」などとしても不自然である。ふつうの司会者が正解を明かす場合のセリフは、

たとえば (29) のようなものだろう。

(29) a. 実は、カマキリって飛んだんですねえ。

b. 実は、答は①だったんですねえ。

形式面で (28) と (29) が大きく違っているのは、「のだ」(「んだ」) と知識修正の「た」が現れる順序である。(28) では「のだ」が先に現れ(「飛ぶので」「①なので」)、その後知識修正の「た」が現れている(「飛ぶのであった」「①なのであった」)。他方、(29) では知識修正の「た」が先に現れ(「飛んだ」「①だった」)、「のだ」(「んだ」)はその直後に現れている(「飛んだんですねえ」「①だったんですねえ」)。このような「のだ」(「んだ」) と知識修正の「た」が現れる順序の違いは、話し手の参与の度合いに関する違いと結びついている。(28) の話し手はドラマのナレータ、つまり、ドラマ内世界をドラマ外から言及するだけの傍観者的存在であり、ドラマ内世界への参与の度合いは(たとえあるとしても)きわめて低い。これに対して(29) の話し手はドラマ内のテレビ番組の司会者である。つまり番組の解答者と(あるいはFAXやメールなどを使えば番組視聴者とさえ)インタラクティブに得る存在で、ドラマ内世界への参与の度合いは高い。

では、このような参与度の違いは、「のだ」と知識修正の「た」の現れる順序の違いと、なぜ結びつくのだろうか? 知識修正の「た」の態度的意味を、過去概念と関わらないものとする立場では、この問題に対して何ら説明の道が立ちそうにない。それに対して、知識修正の「た」の態度的意味を過去概念経由で考える立場では、この問題に対して次のような解答が可能になる: まず、ナレータはドラマ内世界への参与度がきわめて低い。したがってナレータはクイズの正解について、ドラマ内世界における体験とは無縁の、純粹の知識表現をおこなうしかない。ところで第4.2節で述べたように、知識というものはすべて静態的である。そこで、知識修正の「た」は純粹に静態的な表現にしか付かない。「のだ」(「んだ」) の名詞化で言語情報は静態的

になるので、「のだ」(「んだ」)と知識修正の「た」が共起するなら、知識修正の「た」は「のだ」(「んだ」)の後に現れる。次に、番組司会者はドラマ世界内の存在であり、番組収録前にVTRを見て正解を知ったというような、体験を通して正解を告げることがふつう期待される。体験の際(たとえばVTRを見た際)に司会者が発し得る「あ、飛んだ」「やっぱり①だった」などの体験表現には、発見の「た」が現れ得る。いまも飛び続けているカマキリを目の前にしながらの「あ、飛んだ」は、いまも笑い続けている赤ん坊を目の前にしながらの「あ、笑った」と同種のものであり、正解を事前に思いまどった上での「やっぱり①だった」は、サルの大きさを事前に思いまどった上での「やっぱり大きかった」と同種のものである。番組司会者が(29a)「実は、カマキリって飛んだんですねえ」や(29b)「実は、答は①だったんですねえ」のように正解を告げる段階では、カマキリの飛翔が目前にあるわけではない(ふつう正解VTRは司会者が正解を告げた後で放送される)ので、(29)の「た」は発見の「た」と言うわけにはいかず、やはり知識修正の「た」と言うべきだろうが、司会者が(28)の言い方よりも(29)の言い方を好むのは、知識(正解)を体験経由で表現するために、「飛んだ」「①だった」などの体験表現の形式をそのままなぞる必要があるからである。

5.4. 通過地点と非通過地点の違い(アバディーン問題1)

最後に取り上げる事例は、発話時点と目標地点の関係(発話時点で話し手が目標地点を通過しているかどうか)が「た」の自然さを変えるという事例である。やはりこれも非過去説では説明しきれないものである。

たとえば香港で、アバディーンという停留所に行こうとバスに乗ったものの、バス停の名前表示や車内放送が中国語でわからず、バスの中で途方にくれる2人の日本人がいるとする。アバディーンはどの停留所だろうかと話し合ううちにもバスはいくつもの停留所を過ぎていく。この時、1人がもう1人に、次の文(30)のように言うことは自然であり、

(30) アバディーンって、ひょっとして2つ前の停留所なんじゃない？

文(31)のように知識修正の「た」を使って言うことも自然である。

(31) アバディーンって、ひょっとして2つ前の停留所だったんじゃない？

ところが、文(30)(31)の「2つ前」を仮に「2つ後」にすると、事情は変わってくる。文(32)のように「た」を使わず言うことは自然だが、

(32) アバディーンって、ひょっとして2つ後の停留所なんじゃない？

文(33)のように言うことは不自然である。

(33) アバディーンって、ひょっとして2つ後の停留所だったんじゃない？

このような「前」と「後」に関する文(31)(33)の違いは、「問題の『た』は信念を修正するという態度を表す」といった形では説明できない。「2つ前」にせよ「2つ後」にせよ、話し手の信念修正の態度に変わりはないからである。では、このことは過去説ではどう説明できるのだろうか？ それは次の第6節で述べることにしたい。

6. 反実仮想の「た」：「この仕事がなければ、明日は釣りに行ったのになあ」

たとえば、現実にはこの仕事があるため明日釣りに行かないが、この仕事がないという現実と反する仮定のもとでは、明日釣りに行く、ということは、次の文(34)で表すことができる。

(34) この仕事がなければ、明日は釣りに行ったのになあ。

つまり文 (34) で言及されているのは、釣りに行くというデキゴトの未来 (明日) における実現如何だが、それにもかかわらず文末には「た」が現れている。この「た」も『た』は命題の成立時点が過去であることを表す」という考えでは説明できない。このような意味合いは仮想と呼ばれることもあるが、以下では紙谷 (1979) にならって反実仮想と呼び、その文に現れる「た」を反実仮想の「た」と仮称する。先行研究については後で論じることにし、まず3つの事例をとりあげて、反実仮想の「た」の態度的意味を過去概念経由で考える必要があることを示す。

6.1. 運命の分岐点

第1の事例は、上の (34) に関連するものである。「この仕事があるから明日は釣りに行かないつもりだ」と言う超まじめ人間の発言に驚いたという文脈で、その驚きの気持ちを (35) のように表現することは自然である。

(35) 私があんたなら、明日は釣りに行くのになあ。

しかし同じ文脈で、「た」を使って (36) のように表現することは不自然である。

(36) 私があんたなら、明日は釣りに行ったのになあ。

このように、反実仮想であるからといっていつでも「た」が自然になるわけではない。現実と反する仮想をしても、「た」が自然な場合 (たとえば文 (34) 「この仕事があれば、明日は釣りに行ったのになあ」) がある一方で、「た」が不自然な場合 (たとえば文 (36) 「私があんたなら、明日は釣りに行ったのになあ」) もある。このことは、「反実仮想の『た』の意味は過去概念と関わらず、単なる反実仮想である」と考えてしまうと説明できない。だが、反実仮想の「た」の態度的意味を過去概念経由で考えれば次のような説明が

可能になる。

反実仮想には2種類がある。一つは「私があんたなら」というような、実現可能性がそもそもまったくない、ファンタジックな反実仮想である。もう一つは、実現可能だったがたまたま実現しなかった反実仮想である。「あの時、田中がボールを落とさなければ」などの反実仮想はふつうこれにあたる。もちろん、話し手が表現した或る反実仮想がどちらの種類に所属するかは話し手の信念の問題であり、その点で反実仮想の所属が揺れることはあり得る。たとえば、当時の田中の身体能力や体調、置かれた状況などをつぶさに検証していった話し手は、「田中の落球は不可避であった」という結論に至るかもしれない、その場合「あの時、田中がボールを落とさなければ」は実現可能性がない反実仮想になり得る。つぶさな検証を経なくても「万事は起こるべくして起こるのである」といった決定論的な世界観を話し手が受け入れるだけで、やはり「あの時、田中がボールを落とさなければ」は実現可能性がない反実仮想になり得る。逆に、精神交換機や憑依のような、SF的あるいは幻想的な想定を話し手が受け入れている場合は「私があんたなら」は実現可能な反実仮想になり得る。但し、このような反実仮想の所属の揺れがあり得るからといって、反実仮想の分類（実現可能性がそもそもない反実仮想・実現可能だったが実現しなかった反実仮想）じたいが無効ということにはならない。

実現可能性がそもそもない反実仮想とは違って、実現可能だったが実現しなかった反実仮想は、下の図7のような、「運命の分岐」という構図でとらえることができる。

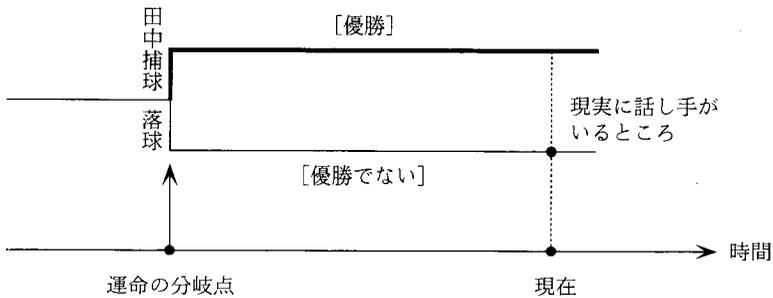


図7：運命の分岐（「あの時、田中がボールを落とさなかったら優勝だった」の場合）

この構図は、「われわれの現実世界の進展にはさまざまな可能性があり、そのうち1つが選択されることで、次の瞬間の現実世界が決まる」という考えに基づいている。運命の分岐とは現実世界のさまざまな進展可能性の発生を指している。運命の分岐はあらゆる瞬間に起こっているが、図9では田中の落球の実現如何に関する分岐だけが描かれている。この図によれば、「あの時」と言われている或る過去の一時点（たとえば、野球の試合中で、敵チームの打者が打ち上げたボールが、守っていた田中のグローブにおさまるかに見えた瞬間）が運命の分岐点であり、この分岐点において、現実世界には2つの進展可能性があった。1つは、田中がうまく捕球し、落球しないという可能性であり、もう1つは田中が捕球できず落球するという可能性である。現実には後者の可能性が選択され、田中の落球が生じている。そして話し手はその現実世界から、田中の落球が生じなかったという別の世界のなりゆきに言及している（「優勝だった」）。

別の世界のなりゆきに言及するには、別の世界をイメージする必要がある。その世界が現実世界とともと同じ世界であり、途中で現実世界と分岐したものであれば、アクセスポイントとしてその運命の分岐点を選ばれることは自然なことだろう。反実仮想の「た」は過去を意味しており、この運命の分岐点が過去であることを表している。文(34)「この仕事が無ければ、明日

は釣りに行ったのになあ」が自然なのは、話し手が現実（たとえば上司に急に持ちかけられた仕事を引き受けた結果、仕事があり、明日は釣りに行かない）とは異なる世界の進展（仕事を断った結果、仕事はなく、明日は釣りに行く）に言及するために、上司からこの仕事をもちかけられた時点のような、過去における運命の分岐点をアクセスポイントととらえるという想定が自然だからである。これに対して文(36)「私があんたなら、明日は釣りに行ったのになあ」が不自然なのは、「私があんたなら」という反実仮想がそもそも実現可能性を持たないために、現在の世界に成り立つ一般的真理としては表現できても（文(35)「私があんたなら、明日は釣りに行くのになあ」）、運命の分岐という構図ではとらえられないからである。

6.2. とりかえしがつく分岐と、とりかえしがつかない分岐

運命の分岐には、後でとりかえしがつくものと、後でとりかえしがつかない決定的なものがある。そして、反実仮想の「た」の自然さは、前者よりも後者の場合が高い。たとえば、Xがテレビゲームで、或るロールプレイングゲーム（ゲームの主人公を操ってそのゲーム世界を冒険するゲーム）をやっているとする。また、Xの友人であり、このロールプレイングゲームの熟達者でもあるYが、これを横から観戦しているとしよう。ゲームの或る場面で、Xが操る主人公は商人から、或るアイテムを買わないかと誘われたが、Xはこれを断った。これを見ていたYが「いまのおまえの判断はまずかった」という感想を文(37)のように、

(37) 誘いを受けてアイテムを買えば、ゲームのエンディング場面で打ち上げ花火が上がるんだけどなあ。

「た」のない文でつぶやくことは自然であり、文(38)のように、

(38) 誘いを受けてアイテムを買えば、ゲームのエンディング場面で打ち

上げ花火が上がったんだけどなあ。

「た」のある文でつぶやくことも自然である。[誘いを受けてアイテムを買えば、ゲームのエンディングで打ち上げ花火が上がる]は現在成り立つにもかかわらず、である²²。この「た」はまさに反実仮想の「た」である。ところで、この「た」の自然さが低くなる場合がある。「いま、主人公はたしかに商人の誘いを断り、アイテムを買わなかった。だが、同じアイテムはまだ入手可能である。もうじき草原の場面になるが、その草原にも同じアイテムが落ちているので、注意深さがせば主人公はそこでアイテムを手に入れられる。そうすれば、やはりゲームのエンディング場面で打ち上げ花火が上がる」などとYが信じていれば、主人公が商人の誘いを断った時点でYが文(37)「誘いを受けてアイテムを買えば、ゲームのエンディングで打ち上げ花火が上がるんだけどなあ」のようにつぶやくことは自然だが、文(38)「誘いを受けてアイテムを買えば、ゲームのエンディングで打ち上げ花火が上がったんだけどなあ」のようにつぶやくことは自然さが低くなる。つまり反実仮想の「た」の自然さは、「主人公が商人の誘いをいったん断れば、ゲームのエンディング場面で打ち上げ花火は上がらない。とりかえしがつかない」とYが感じているかどうかによって影響を受ける。

このことは、反実仮想の「た」の意味を過去概念と関わらない、単なる反実仮想と考えれば説明できないだろう。だが、反実仮想の「た」が過去を意味しており、運命の分岐点であるアクセスポイントが過去であることを表す、と考えれば、このことには次のような説明ができる：「主人公が商人の誘いをいったん断れば、もうとりかえしはつかず、ゲームのエンディングで打ち上げ花火は上がらない」という認識は、「主人公が商人の誘いを断った時点は、主人公の運命の決定的な分岐点である」という認識にほかならない。Yがこの認識を持つ場合、情報[ゲームのエンディングで打ち上げ花火が上がる]は現在とはいえ、現実世界とは異なる別世界(反事実世界)に成り立つ情報であるから、この情報のアクセスポイントとしては現在時点を選ぶこと

もできるが、現実世界とこの世界が分岐することになった運命の分岐点（主人公が商人の誘いを断った時点）を選ぶこともできる（図8）。現在時点を選べば（37）「ゲームのエンディング場面で打ち上げ花火が上がるんだけどなあ」という表現が生じ、運命の分岐点を選べばこれは過去であるから（38）「ゲームのエンディング場面で打ち上げ花火が上がったんだけどなあ」という表現が生じる。

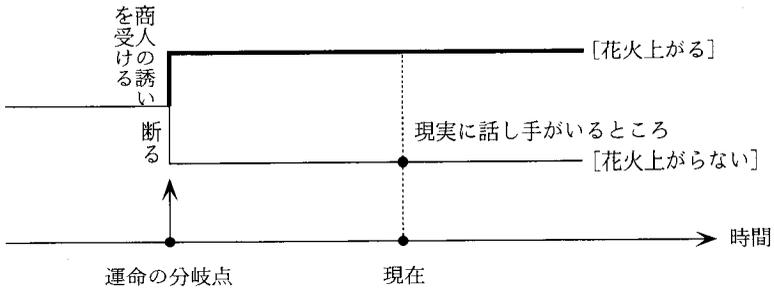


図8：とりかえしがつかない反事実世界の情報 [エンディング場面で花火が上がる] に言及するには、運命の分岐点（商人の誘いを断った過去時点）をアクセスポイントにすることが有効。

もし仮に「問題のアイテムは草原にも落ちている。商人の誘いを断ったことが後でとりかえしがつく」とYが認識していれば、その世界と現実世界との接点は、第1の分岐点（商人から誘いを受けた時点）だけでなく、第2の分岐点（草原に到達する時点）にも見いだせることになる（図9）。

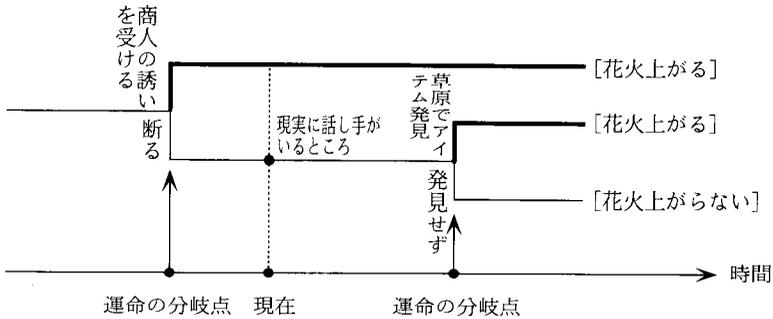


図9：「エンディング場面で花火が上がる世界」への分岐点がまだ先に見いだせるなら、過去の分岐点（商人から誘いを受けた時点）は重要でなくなり、アクセスポイントとして選ばれにくくなる。

時間的に後続する第2の分岐点がとりかえしがつかず決定的であるのに対して、先行する第1の分岐点はとりかえしがつき、それだけ運命の分岐点ととらえられにくい。アクセスポイントとして選択され反実仮想の「た」が現れることも、それだけ不自然になる。仮に主人公は草原も通過してしまったと想定すれば、反実仮想の「た」の自然さは再び高くなるが、それはこの想定のもとでは、第2の分岐点も過去になっているからである²³。

6.3. 過去の分岐と未来の分岐

運命の分岐点がアクセスポイントとして選択されるという考えは、反実仮想の場合にしか適用できないわけではない。第5節末尾で取り上げた、走行するバスの中で「どこがわれわれの降りるべきアバディーンなのか」を論じるという事例の問題も、反実仮想ではないが、運命の分岐点をアクセスポイントと考えることで説明がつく。

まず注意を払わねばならないのは、アバディーンの実例の話手が言及しているのはアバディーンの物理的な位置というよりも、むしろ、自分たちがアバディーンでバスを降りることができるのかどうかという、自分たちの運命だということである。それぞれの停留所ごとに、話し手たちには「そこで

バスを降りる／バスを降りない」という選択があるので、話し手たちの運命はその都度分岐し、図10のようになる。

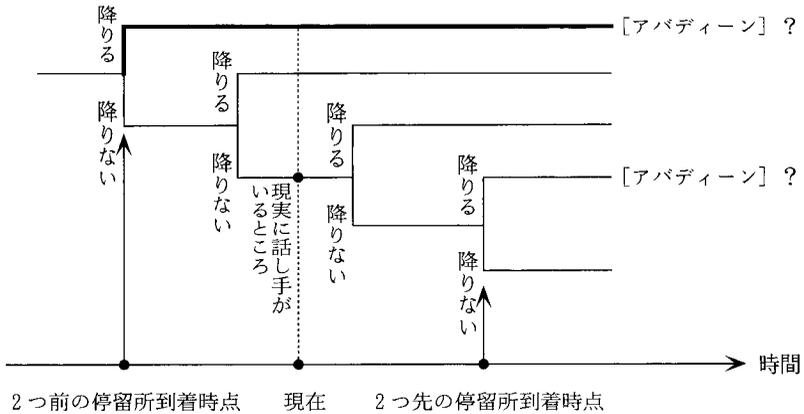


図10：アバディーン問題における運命の分岐

2つ前の停留所はすでにバスが通過しており、そこで降りなかったという行為はいまさらとしかえしがつかないが、2つ先の停留所はバスがまだ通過していない。つまり、としかえしがつかない本物の「運命の分岐点」と言えるのは、過去の分岐点だけである。だからこそ、過去の分岐点はアクセスポイントとして選ばれ得るが（文(31)「アバディーンって、ひょっとして2つ前の停留所だったんじゃない？」は自然だが）、未来の分岐点は選ばれ得ない（文(33)「アバディーンって、ひょっとして2つ後の停留所だったんじゃない？」は不自然である）。文(33)の「た」は反実仮定の「た」ではなく知識修正の「た」だが、自分たちの運命を論じているので、運命の分岐点がアクセスポイントとして選択され得る。

6.4. アバディーン問題 2

知識修正の「た」に運命の分岐点に関わる場合をもう1種類挙げておこう。この場合も、知識修正の「た」の態度的意味を過去概念と無関係に考えると説明できないが、過去概念経由で考えると説明できる。まず事例を紹介しよ

う。

バスの中で「どこがアバディーンだろうか」と話している2人の日本語が痾にさわったのか、なぜかバスの運転手が2人に対して怒りだし、2人は途中でバスから道ばたに降ろされてしまったとする。この文脈では、走り去るバスを見ながら、1人がもう1人に「こわかったね～。ところでさ、アバディーンって、ひょっとして2つ先の停留所だったんじゃない？」などと言うことはできる。たとえ、アバディーンという停留所を探すことを話し手たちがまだあきらめていないとしても、である。つまり「2つ先」でもバスを降りれば「た」の文(33)は自然になる。

この状況では、2人は途中でバスを降ろされている。たとえ次のバスを待ってアバディーン探しを再開するにしても、これはアバディーン探しを妨げる重大なデキゴトであり、かつ、もはやとりかえしがつかず、運命の分岐点と言える(次ページ図11)。そこで、バスを降ろされなかった反事実世界の情報として、情報「2つ先はアバディーンだ」にアクセスする場合、バスを降ろされた分岐点がアクセスポイントになる。このアクセスポイントは過去なので文(33)は自然になる。

6.5. 先行研究との対比

反実仮想の「た」が動態的な述語の文末にも現れることは、岩崎(2000:33)が指摘するとおりである(岩崎の用語では「動作性述語」の文)。この第6節初頭で挙げた文(34)「この仕事がなければ、明日は釣りに行ったのになあ」も、岩崎の挙げる文をもとにしている。

反実仮想の「た」の意味について紙谷(1979)は、「テンスに関する意味の延長上に位置するものと考える」と述べ、「派生した意味」という言い方をする一方で、「以上にとりあげた(態度的な)意味をテンスおよびアスペクトに関する意味に還元してかんがえてみた」と述べる(紙谷(1979:25))。それに対して岩崎(2000:33-34)では、反実仮想の「た」の意味を過去概念経由で考えることは明確に不当とされている。というのは、岩崎(2000)は

ムードの「た」は、静態的な命題表現に現れる場合のみ、過去概念経由でとらえられるという前提を立てるからである。岩崎（2000）と同様の前提を立

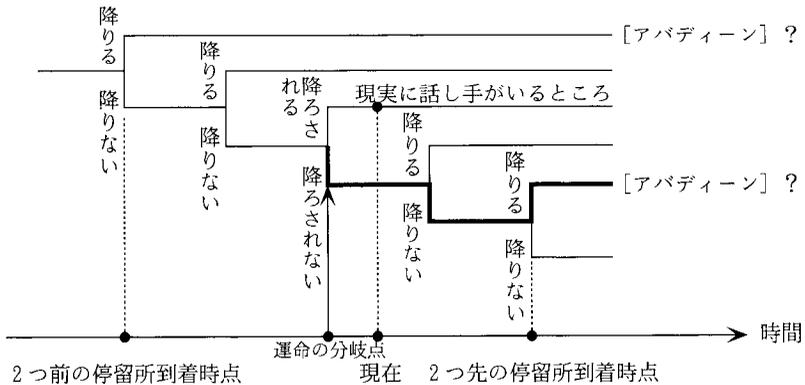


図11：アバディーン問題2における運命の分岐

てる金水（2001）では、反実仮想の「た」を過去概念経由でとらえながらも、反実仮想のような世界の分岐が語られる文脈では、形式上は動態的な述語も、意味的には静態的である（たとえば反実仮想の文脈では「釣りに行った」は「釣りに行くところだった」「釣りにいくはずだった」とほとんど意味が違わない）旨述べられている。この説明は納得のいくものだが、「では世界の分岐が語られる文脈では、なぜ、どのような述語も意味的には静態的になるのか？」という問題が残る。このことは、世界の分岐を語る場合は一分岐世界での体験をもとにはできないので、純粹の知識を語らなければならない、したがって静態的にとらえられると考えられるだろう。

7. おわりに

現代日本語（共通語）のムードの「た」と呼ばれる一部の「た」の文には、発見に代表されるさまざまな態度的意味が感じ取れる。だが、ムードの「た」をどこまで認めるか、ムードの「た」にはどのような種類があるか、ムードの「た」の態度的意味を過去概念から導き出すかどうかは、研究者によって

さまざまである。本稿でまず指摘したのは、意外にも、従来の多くの研究は「ムードの『た』が具体的な文脈に応じて自然になったり不自然になったりすることを、自説がどれだけ説明できるか」という観点が欠けており、細かなデータを説明してみせることによって自説の妥当性を実証しようとはしていないということである。次に本稿は、豊富な事例観察を通じて、ムードの「た」として4種類（発見の「た」・思い出しの「た」・知識修正の「た」・反実仮想の「た」）を認めた²⁴。そして、それらの「た」の意味は実は過去であり、テンスの「た」（過去を意味することが明白に思える「た」）との相違点は、「何が過去なのか」ということに尽きることを示した。つまり、テンスの「た」は命題の成立時点が過去であることを示すが、発見の「た」は話し手が探索体験をおこなった時点が過去であることを示す。思い出しの「た」は、話し手が問題の知識に触れた時点が過去であることを示す。知識修正の「た」は、話し手が古い知識を心内に登録した時点が過去であることを示す。反実仮想の「た」は、運命の分岐点が過去であることを示す、ということであり、発見その他の態度的意味は、その結果現れるものである。このような、過去であることが「た」で表される時点（命題成立時点・探索体験時点・問題の知識に触れた時点・古い知識の登録時点）を統一的にとらえるために、本稿は情報のアクセスポイントという認知的概念を提案した。文を語る話し手は多くの場合、その文の内容をイメージしなければならず、それには心内でそのイメージ情報にアクセスする必要がある。情報のアクセスポイントはイメージ情報へのアクセスを可能にする、時間軸上の点である。1つのイメージ情報が複数個のアクセスポイントを持つこともあり、その場合、どのアクセスポイントが選ばれるかは、話し手の知識状態（ある知識に知悉しているかどうか）や焦点（何に重点を置いているか）、さらに文脈に応じて決まる。

1 本稿での「ムード」とは便宜上、反事実だけでなく、話し手の態度（本文で後述する）を広く含むものとする。

- 2 ここで「説明できそうに見える」と述べたものが本当に説明できるかどうかについては、説が分かれる。現実の発話データを重視する立場では、文(1)の「た」の意味を「命題の成立時点が過去であることを表す」と説明することは疑問視されているが(Szatrowski (1987)を参照)、本稿ではこの問題には立ち入らない。
- 3 「ムードの「た」」という名称とその定義は、基本的に寺村(1971, 1984:319-320)に基づく。断っておきたいのは、本文で述べたように、寺村(同)はムードの「た」の意味をテンスやアスペクトから完全に切り離せると考えていたわけでは必ずしもないということである。寺村にとってムードの「た」は、テンスの「た」やアスペクトの「た」から「一応切り離して」(寺村(1971, 1984:320))みたものにすぎない。本稿で言うムードの「た」も、まさにこのような暫定的な性格を持っている。なお、「た」の表記は従来統一されておらず、たとえば寺村(1971, 1984)はカタカナ表記「タ」、たとえば金田一(1976)ではひらがな表記「た」となっている。本稿では先行研究を引用する際もひらがな表記にそろえる。
- 4 ここで言う「主節末尾」とは厳密なものではないことを断っておく。つまり、主節末尾には「よ」「ね」「な」「か」「ぞ」「ぜ」「わ」「っけ」「のになあ」「んですなあ」「んだけどなあ」などが現れており、「た」はその直前に現れているという場合(たとえば「～たよ。」の場合)も含むものとする。
- 5 論をかんたんにするため、ここでは「この宇宙飛行士はぞんざいな性格か何かの理由で、記者会見において丁寧体ではなく普通体の日本語で発言する」という設定にしてある。この設定の非現実性は、論の当否に影響しないと筆者は考えている。
- 6 但し、日常用語「経験」と日常用語「体験」が、まったく同義というわけではない。たとえば「戦争の経験」は個人にかぎらず団体や国家も持つことができるが、「戦争の体験」を持てるのは個人だけである。団体や国家はアニメーターが低いので「戦争の体験」は持てない。このように「体験」は「経験」とちがってアニメーターと強く結びついている。もちろんいま定義を問題にしているのは専門用語としての「経験」「体験」だが、「体験」というネーミングは、専門用語と日常用語が連続しがちであることを意識してのものである。
- 7 チェイフが示すように(Chafe (1977:50)), 心内にたくわえられている経験の少な

- くとも一部はアナログ的な形でたくわえられており、命題構造のような形でたくわえられてはいない。
- 8 さらに総論としては定延（2002d）を参照されたい。
- 9 ひ弱で劣等生ののび太を、未来から来たロボット「ドラえもん」がハイテク機器を駆使して支援する人気漫画。
- 10 この点、郡司隆男氏に有益なご教示を得た。
- 11 この点、井上優氏のご指摘による。
- 12 最後の状況は、井上優氏のご指摘による。
- 13 より厳密には、探索は「体験の中核をなす、認知者と認知環境とのインタラクションの一種」と言うべきだが、ここではわかりやすさを優先して簡略化して述べる。探索と言語現象の関わりについては、さらに定延（1999, 2000, 2001a）を参照。
- 14 説明をかんとんにするために、探索者は部屋の中で休憩せず、探索意識はとぎれないとしておく。以下も同様である。
- 15 「あんなところにサルが集まっていたよ」など、存在の様態（集まっている）を述べる文はここでの存在文に準じる。
- 16 この目撃者が先月以外の月にも事件を目撃しており、自分が目撃した複数件の事件について捜査員に話している、という事情を想定すれば、「犯人は先月は白人でした」という証言は必ずしも不自然ではない。この事情は、「先月は」を時点限定表現ではなく、「先月の事件は」に似た、事件限定表現にするからである。また、SFやファンタジーなどで描かれる、人種が変更可能な世界を考えても、「犯人は先月は白人でした」という証言は必ずしも不自然ではなくなる。だが、以上のことは、本稿の主張と直接関わらないので、本稿では「目撃者は事件を1つしか目撃していない」「人種は変更不能である」という前提で論を進める。
- 17 坂原茂氏の論考もここに位置づけられると思うが、論文未入手のため本稿では言及を控える。
- 18 益岡（2000:28-29）・岩崎（2000:37, 注13）は「あ、来た」の「た」も「あ、笑った」の「た」も、テンスの「た」としている。さらに、「あ、来た」の「た」の意味を完了とする説としては紙谷（1979:21）がある。本稿では完了と過去の関係に立ち

入る余裕はないので、紙谷説と益岡説・岩崎説の異同は検討しない。また、「あ、笑った」との関係は不明だが、寺村（1971, 1984:342）や尾上（1982, 2001:373）では「あ、来た」は「あ、あった」と同じ扱いをされている。金子（1995:242）も「あ、来た」の「た」を発見の「た」に含め、述語「来る」の意味が動態的であることを理由に「発見の『た』は静態的な命題表現にしか現れない」という考えを不当と論じている。

- 19 ここで言う探索可能領域は探索領域とは別物である。たとえば広大なテーマパークを何時間もかけて調べたという場合、探索領域は広大なテーマパークである。そして、その中にいる話し手の探索可能領域は、どの一瞬においても、探索領域のごく一部である。話し手は（典型的には自身が移動することによって）探索可能領域をずらしていくことで、探索領域全体をカバーする。探索可能領域はラネカーの視野（viewing frame, Langacker（1997:63-64））と呼んでもよい。
- 20 金水（1998）でも発見の「た」の意味はテンスととらえられるとしながら（pp.171, 181）, "ものぐさなパーフェクト"ともされる（p.182）。
- 21 この考えは特に突飛な考えではない。たとえば金水（1998:178）は、話し手心内のデータベースのデータは、静的なものに限られると仮定している。
- 22 「[打ち上げ花火が上がる]が未来（ゲーム終了時）において成り立つ」と考えることもできるかもしれないが、どちらの考えをとってもここでの論の当否には影響がない。
- 23 金水（2001）では、そもそも日常言語における反事実条件文（「pであればqである」）は裏（「pでなければqでない」）を成立させ、このことが問題の「た」を自然にすると考えられているが、本稿では同様の考えをとらなかった。というのは、日常言語における反事実条件文のすべてが裏を成立させるとはかぎらないからである。テレビゲームの例でいえば「このアイテムは商人から買わなくても手に入れられる。後で草原で拾うこともできる。そうすれば、やはりゲームのエンディングで打ち上げ花火が上がる」とYが認識していても、主人公が商人の誘いを断った時点で、「た」のない反事実条件文（37）「誘いを受けてアイテムを買えば、ゲームのエンディング場面で打ち上げ花火が上がるんだけどなあ」をYがつぶやくことは自然

だからである。つまり、「誘いを受けてアイテムを買えば、ゲームのエンディングで打ち上げ花火が上がる」(pであればqである)からといって、「誘いを断り、アイテムを買わなければ、ゲームのエンディングで打ち上げ花火が上がらない」(pでなければqでない)とはかぎらない。問題の「た」が自然であるためには、「条件文が裏を成立させる」ということはたしかに必要なが、裏の成立は条件文の日常言語性から保証されるものではなく、運命の分岐点という認知から出てくるものだろう。本稿が「運命の分岐点」という概念を認め、これを情報のアクセスポイントと結びつけたのは、以上の理由による。

²⁴ 但し、これら4種でムードの「た」が尽きていると主張しているわけではない。本文でも述べたように、ムードの「た」かどうかの判断は、研究者によって異なる部分がある。そのような、判断が揺れる「た」は本稿ではなただけ取り上げてきたが、まだまださまざまなものが残っていることを最後に述べておきたい。たとえば、相手を制止して言う「待った」などの「た」である。この「た」についての言及は、少なくとも三上(1953, 1972:225)までさかのぼることができるが、本稿では取り上げなかった。その最大の理由は紙面上の都合だが、これらの「た」がごくかぎられた固定的な言い回しに特有、とまではいかないにしても、慣用句的性格を色濃く持ち、あまり生産的でないことも理由の一つである。上の「た」にしても、これまでに挙げられているデータのほとんどが「買った、買った」のような反復表現であり、反復が必要ないのは「待った」ぐらいである。「??急いで買った、急いで買った」のような修飾表現も稀で、特定の語調(金子(1995:251))を伴っている点からしても、慣用句的な性質が濃いと言える。

* 本稿は、科学研究費補助金による基盤研究C(2)「時間表現・空間表現の意味の構造化に関する日本語と中国語の対照研究」(課題番号:13610676, 研究代表者:井上優), 基盤研究C(2)「日本語と中国語のとりたて表現の数量的側面に関する認知的対照研究」(課題番号:13610658, 研究代表者:定延利之)の成果の一部である。

言及文献

- Chafe, Wallace L. (1977) "Creativity in verbalization and its implications for the nature of stored knowledge," In Roy O. Freedle (ed.), *Discourse Production and Comprehension*, Norwood, New Jersey: Ablex Publishing Corporation, 41-55.
- 井上 優 (2001) 「現代日本語の「タ」——主文末の「…タ」の意味について——」, つくば言語文化フォーラム (編) 『「た」の言語学』, 97-163, 東京: ひつじ書房.
- Iwasaki, Shoichi (1993) *Subjectivity in Grammar and Discourse: Theoretical Considerations and a Case Study of Japanese Spoken Discourse*, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 岩崎 卓 (2000) 「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学』19-5, 28-38. 東京: 明治書院.
- 紙谷 栄治 (1979) 「「た」の特殊な用法について」『京都府立大学学術報告人文』31, 17-30.
- 金子 亨 (1995) 『言語の時間表現』東京: ひつじ書房.
- 金水 敏 (1998) 「いわゆる「ムードの「タ」」について——状態性との関連から——」, 東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会 (編) 『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』, 170-185, 東京: 汲古書院.
- 金水 敏 (2000) 「時の表現」, 金水敏・工藤真由美・沼田善子『時・否定ととりたて』, 3-92, 東京: 岩波書店.
- 金水 敏 (2001) 「テンスと情報」, 音声文法研究会 (編) 『文法と音声Ⅲ』, 55-79, 東京: くろしお出版.
- 金田一 春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論文集X』[金田一 (編) (1976) に再録. 27-61.]
- 金田一 春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』東京: むぎ書房.
- 工藤 真由美 (1997) 「反事実性の表現をめぐって」『横浜国立大学人文紀要第Ⅱ類 (語学・文学)』44, 51-65.
- 工藤 真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の

表現——』東京：ひつじ書房.

工藤 真由美 (2002)「文法 (理論・現代)」『国語学』53-4, 22-29, 国語学会.

国広 哲弥 (1967)『構造的意味論——日英両語対照研究——』東京：三省堂.

Langacker, Ronald W. (1997) "Consciousness, construal, and subjectivity," In Stamenov, Maxim I. (ed.), *Language Structure, Discourse and the Access to Consciousness*, 49-75. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

益岡 隆志 (2000)『日本語文法の諸相』東京：くろしお出版.

松田 文子 (1998)「眼前事態描写における「タ」の機能——過去時への廻りを要請する「タ」——」『日本語教育』97, 72-82, 日本語教育学会.

三上 章 (1953)『現代語法序説——シNTAXの試み』東京：刀江書院. [くろしお出版から復刊 (1972)].

牟 世鍾 (1993)「発見・思い出しにおける「ル形」と「タ形」」『日本語学』12-2, 88-97, 東京：明治書院.

森田 良行 (1995)『日本語の視点——ことばを創る日本人の発想』東京：創拓社.

森田 良行 (2001)「確実意識を表す「た」」『言語』30-13, 72-77, 東京：明治書院.

奥田 靖雄 (1986)「まちのぞみ文 (上)」『教育国語』85, 21-32, 東京：むぎ書房.

尾上 圭介 (1982)「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1-2, 17-29, 東京：明治書院. [尾上 (2001) に再録]

尾上 圭介 (2001)『文法と意味 I』東京：くろしお出版.

定延 利之 (1999)「空間と時間の関係——『空間的分布を表す時間語彙』をめぐって——」『日本語学』18-9, 24-34, 東京：明治書院.

定延 利之 (2000)『認知言語論』東京：大修館書店.

定延 利之 (2001a)「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」, 日本語文法学会 (編)『日本語文法』1-1, 111-136, 東京：くろしお出版.

定延 利之 (2001b)「情報のアクセスポイント」『言語』30-13, 64-70, 東京：大修館書店.

定延 利之 (2002a)「現代日本語主節末の「た」試論」『相互行為の民族誌的記述——

- 社会的文脈・認知過程・規則 — 』(平成11～平成13年度科学研究費補助金研究成果報告書(基盤研究B(1), 研究課題番号:11410086, 研究代表者:菅原和孝), 119-132.
- 定延 利之(2002b)「言表世界の基本構成——表示空間分布の時間詞——」, 北京大学外国語学院日本語文化系・北京大学日本文化研究所(編)『日本語文化論集』3, 32-45, 北京:北京出版社・文津出版社.
- 定延 利之(2002c)「時間から空間へ?——『空間的分布を表す時間語彙』をめぐる」, 生越直樹(編)『シリーズ言語科学4 対照言語学』, 183-215, 東京:東京大学出版会.
- 定延 利之(2003a)「体験と知識——コミュニケーション・ストラテジー」『國文學——解釈と教材の研究——』48-12, 54-64, 東京:學燈社.
- 定延 利之(2003b)「インタラクシヨンの文法, 帰属の文法」『中国語学』250, 250-263, 日本中国語学会.
- 定延 利之(2003c)「現代語の限定のとりたて」, 沼田善子・野田尚史(編)『日本語のとりたて——現代語と歴史的変化・地理的変異』, 145-158, 東京:くろしお出版.
- 定延 利之(2002d)「インタラクシヨンの文法に向けて——現代日本語の疑似エヴィデンシャル——」, 京都大学大学院文学研究科言語学研究室(編)『京都大学言語学研究』21, 147-185.
- 定延 利之(近刊)「モノの存在場所を表す「で」」, 影山太郎・岸本秀樹(編)『日本語の分析と言語類型』, 東京:くろしお出版.
- 鈴木 重幸(1965)「現代日本語の動詞のテンス——言いきりの述語に使われたばあい——」『ことばの研究』2, 1-38, 国立国語研究所.
- Szatrowski, Polly E. (1987) "Pastness" and "narrative events" in Japanese conversational narratives," In: Tomlin, Russell S. (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*, 409-433. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 高橋 太郎(1983)「スルともシタともいえるとき」『金田一春彦博士古稀記念論文集

I：国語学篇』，東京：くろしお出版。〔高橋（1994）に再録〕

高橋 太郎（1985）『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』（国立国語研究所報告82）
東京：秀英出版。

高橋 太郎（1994）『動詞の研究——動詞の動詞らしさの発展と消失——』東京：
むぎ書房。

寺村 秀夫（1971）「'タ'の意味と機能」『言語学と日本語問題』〔寺村（1984）に再
録〕

寺村 秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京：くろしお出版。

Zic Fuchs, Milena (1996) "Here' and 'there' in Croatian: a case study of an
urban standard variety," In: Martin Pütz and René Dirven (eds.) *The
Construal of Space in Language and Thought*, 49-62. Berlin; New York:
Mouton de Gruyter.